

ジュエリー REAL

ふたなり2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

社会人となった一色いろは、毎日続く変わらない日々が面白くないと思っていた。1人でアテもなくブラブラとウインドーショッピングをしながら見つけたお店が
高校時代の「先輩」こと八幡のお店だった！
少し大人のラブストーリー

目次

あの先輩がく!?	1
懐かしい会話	6
食べて下さい、先輩	11
仲直りの紅茶	16
ライバル?	22
結衣の告白	28
先輩の為に	34
見てしまった・・・	39
先輩の疑惑	45
二人のアルバイト	51
アクセイイベント	56
いろはの不安	63
話題の留美ちゃん	68
留美のお祝い	75

あの先輩が〜!?

OLになって2年目、会社にもなれて若い営業の男どもはしょっちゅう飲み会とかデートに

誘いに来たり中には交際を申し込んでくるが浅はかであたしの体目当て： 上っ面の関係しか

求めない人ばかりでお付き合いなんかしたくない。差し障りが無い程度の付き合いにすませ、

何時も距離を置いていた。

仕事がらみの事ばかりで毎日が同じことの繰り返し・・・嫌になる。

大学時代の友達、『由香』とつるんでるけどいい人が出来たらしく最近はさっぱりだ・・・

やっと貰えた賞与は雀の涙程……本当に景気が良いのかな？

「OLのボーナスなんてたかが知れてる、思い切って使っちゃおか……」
駅前通りを目的もなしにブラブラと眺め、物思いに眺めて歩いていた。

「服でも買おうか？あ〜ん、この前のショップのまだ売ってるかな？でもシーズン終わるし

バーゲンでも買えるから……」

こんな時は中々決まらず結局買わない事が多いんだよね。買わなければ1日が潰れちゃう、

あ〜貴重なあたしの休日が勿体ない無くなっちゃうよ！

たけど、そのお店が目にとまった。

間口が一間位の凄く小さなお店……今までそこはチケットショップだった。

新しく出来たらお店らしい、小さなアクセサリーショップみたい。店前のガラス越しに並んだ

シルバークラークセは感じがよく仕上げも丁寧で可愛らしい物が多かった。

「お店の名前は……えーとっ……『ジュエリー REAL』リアル？でいい

のかな。

小さいお店だけどオシャレな感じがするし、気になったのがシルバーアクセ教室生徒募集中の

ステッカー、テレビで見て前から少し興味があるんだよな。

1度聞いてみようと思いい切つてドアを開けた。

「いらっしやい…」

店の奥から男の店員さんらしき人の声がした。中のショーケースにもシルバーを基本に色んな

小物があつて目を楽しませてくれる。

「気に入った物があれば声を掛けて下さいね。」

さっきの店員さんらしき人からまた声を掛けられたけど余り気にしてないのか店前に出てこない。

気楽に見られるからお客の立場から言うと楽だけど商売熱心じゃないようだ。

教室の件を聞いてみようと思つて奥の店員さんに声を掛けた。

「あのくすみません、お店の前に貼つてあるシルバーアクセ教室つてまだ募集してますか？」

「あくお客さん、今大事な仕上げの溶接をしてるところでほんの少し待つてくれませんか？」

あと2〜3分で終わるんで。」

随分と愛想が無い店員さんだと思つたけど待つ事にした、だって暇なんだから！

「構いませんよ〜可愛いので作つて下さいね、後よかつたら作りたても見てみたいな」

「ははっ、期待に答えたいけどこれは預かりものの手直しだからちよつと難しいな…出来たと、

どれお待たせしてすみません何でしょうか？」

店前に出て来た店員さんは先程までしてたジーンズ素材の

エプロンを簡単に畳み洗い立ての様な白いカジュアルシャツとスリムのジーンズにスニーカーを履いていた。

その人の顔を見てあたしは：何だか嬉しく懐かしさがこみ上げた。

「あつ…えつ、先輩…?」

「あ?先輩つて?一色…一色か?」

「え〜っ!何してんですか?こんな所で気でも狂ったんですか?もしかしたら人違いですか?」

「今からでも謝ります間違えましたごめんなさい!」

「そう…あたしの知ってる先輩は目が腐っててボツチでこんな接客のいる仕事なんか」

「絶対出来ないから間違えたんだ… もっと、ビックリしちゃうのが少し大人っぽくなって…」

「胸元にさり気なくセンスの良いペンダントしてるし…それにカッコいいかも… やっぱり違うよね?」

「つて…あれ?さつき、あたしの名前を呼んだけど、じゃあそこにいるのは先輩本人つて事?どうなってんの?」

「勘違いすんなよ、久しぶりだな一色。おっと今はお客様だったな、今日は何か欲しいものがあるのかな?」

「どうしちゃったんです一体?」

「あくこの店の事か?大学出てから社畜になるのが嫌で、だから一人で出来る仕事を」

「やりだしたのが此れだ。修行先のオーナーから駅前通りにお店をオープンするから頑張れと」

「無理矢理任せられたんだよ、全く。」

「凄いいじゃないですか!先輩、店長さんだなんて信じられません!」

「あーそのお客さん?今日は何を求めで?」

「あの先輩がですよ?高校時代には考えられないじゃないですか!先輩が接客してるんですよ?」

「これは事件です!」

「あのね、俺も世間の荒波に飲まれて生きてるの。お客さんも気に入れば買ってくれるし」

「此方からは声を余り賭けずに済むがお前さんみたいに聞いて来るお客だけ相手してれば」

「いいから楽なのよ。それで今日は何?」

「はっ、余りの驚きで忘れていました。先輩がお店のアクセ作ったんですか？」

「まあ仕事だからな。」

「凄いです、感動しました。」

「あつそう…で、今日は何？」

「もおくく人が凄いつて誉めてんのにもう少し照れたりリアクションくれなきや駄目じゃない

ですか本当に！」

「はいはい、ありがとうございますお客様。」

「先輩、お店のアクセも素敵ですけど表にアクセ教室の生徒募集中つて貼つてあるじゃないですか、

あれまだ大丈夫ですか？」

「一応してるが…まさか、一色が入会したいとかじゃあないだろうな？」

「え〜どうしてですか？あたしがアクセ教室に入りたいのおかしいですか？前から興味あつたし

システムを聞いてみようと思ひまして。」

「うちのシステムはこのパンフに書いてあるから読んで見てよ、あくそれから本当にやりたいの一色？」

「何ですか、その嫌そうな顔は。」

「別に、面倒だなんてね。これ以上生徒が増えるのは面倒だから締め切ろうと思つてたところだ。」

「そんなに生徒さんつて多いの先輩？」

「あく今んとこ10人位かな〜」

「そんなに居ないじゃないですか、あたしも教室に入りたいので宜しくお願いします。」

「えっ？入るの？面倒だから買うだけにした方がいい…うん、これなんか一色に似合いそうだ。」

「何で急に嫌がるんですか、あつ、その後で見せて下さいね ♪ ってか、あたしが入会すると何で

面倒何ですか？もう決めましたから、何時から教室にすればいいん

ですか？」

あのね、生徒さんが増えるとやる事が多くなるし他のアクセ作る時間もあるんだから大変なの。

特に一色の性格だとまた面倒な所は俺に頼るに決まってる、だからだよ。

じゃあ教室の事は無かったと言う事で…。」

「うー、違ーうー！あたしそんなに不器用な方じゃないの先輩知ってるでしょ？」

それに綺麗な物作るの女の子方が得意なんですよ先輩！」

全然、商売熱心じゃあないんだからー昔とあんまり変わってないかも。

「ふーむ、一理ありだな。まあ生徒さんも女子ばっかだし友達も出来るだろう。」

……あーアイツもいるし。」

「えっ、誰ですか？あたしの知ってる人がいるの？」

「まあ、教室にすれば分かるから安心しろよ一色。じゃあ、これが申込用紙だ分らなかったら

教えるから記入してくれ毎週水曜日と金曜日夕方 6時30分からやってるからどちらでもいい日に

通ってくれ。」

「はい、ありがとうございます、やったー嬉しいな。よくし素敵なアクセどんどん作っちゃうぞー！」

「やれやれ、厄介者がまた増えたか。」

「何ですかそれ？6年ぶりの可愛い後輩に再会できて先輩は嬉しくないんですか？」

あたしは少しだけ嬉しかったのに！」

懐かしい会話

「ねえ、先輩？これなんかあたしに似合うと思います？こっちもいいし…」

「二色、いくらうちがお値打ちなプライスだからと言って今週3つも買ってるし買い過ぎだ。」

「もうく売上に貢献してるし、それにボーナスでたばかりだし先輩のアクセ、顔に似ず素敵なんだもん♪」

「はいはい、ありがとうございます。でもね、お前あれから毎日来てるじゃん、てか来すぎだから。」

「いいじゃないですか、教室まで後、何日かあるんだし少し位依ったつて。それにレモンティー出してくれるし。」

「まあ、買ってくれるし一応お客さんだからな。」

「買わなくても出してくれますよね、来る度に出してくれたら毎日でもいいかな。」

「相変わらずだな、こんな所で道草しないでお前なら他に幾らでも行くことあるだろう？」

「何ですか？予定の確認をそれとなく聞いてデートに誘う気ですか？安易過ぎて気に入らないので」

もう一度練り直して出直して下さい、ごめんなさい。」

「全く何だよそれ？何年ぶりかでお前に振られたな通算で何回目だ？100回は軽く越えてんじゃね？」

「ところでお休みとか何やってるんですか先輩？」

「あつ？逆に聞くの？」

「あんま変わんねえな、工房に籠って新しい作品作ったりしてる。」

「相変わらず引き込もってポツチやってんですね。」

「性にあってるし時々、小町が差し入れしてくれるからこれで満足だ。」

「小町ちゃん？懐かしいなあ〜高校時代よく手伝ってもらったりしたなあ〜 ね、

先輩？小町ちゃん元気してます？」

「ああ、教室に通えばその内、会えるんじゃないか。」

「楽しみが増えるますね先輩！」

「俺は面倒が増えるだけだよ。」

「もおー、そう言えば先輩の工房を見て見たいのですが少しいいですか？」

「え？見たいの？」

また露骨に嫌そうな顔して。

「駄目なんですか？」

「何にもないぞ、こんなところ見たかったら覗いてこいよ。」

「はい、では失礼して…」

小さな工房の中は作業机と椅子が2つ並べられ専門工具や小さな溶接機が整理されて

仕事しやすいよう工夫がしてあるようだ。

「プロの仕事場みたいですね。」

「駆け出しだか機材だけは揃えてあるよ一応プロだからな。」

ここからあんな素敵なアクセを先輩が次々と作り出すなんてちよつと不思議な気がする。

「ところで一色、お前って暇なの？」

「何ですか？急にさつきも。」

「今日はそんなに忙しくないから、まっ偶にはな。こっちの工房に入れよ、」

一色。」

「え？いいんですか？だって…」

「何遠慮してんの？さつきも入ってんじやん。」

「だって…、暇そうにしてたらデートしてくれるとか下心見え見えの行動では」

納得出来ないのもう少しお洒落で格好良く誘って下さい、ごめんなさい。」

「違うから…、暇なら少しやってみるか？」

胸が「ドキ」とした何、何を？あたしがアタフタとしてると先輩が赤くなりながら

「勘違いしてんじゃねえよ、ほら…アクセ作りたいんだろ？スクールの日じゃないけど」

「少しやってくかって事だよ。」

「わあ〜いいんですかあ〜！昔から先輩は頼りになつて

素敵です〜、尊敬します〜ありがとうございます！是非教えて下さい！

「……………」

……………

「各道具と機械の名前とかは分かったな？使い方はこれから順番に教えるから慌てんな。」

「はい、大体分かりました、何でも順番ですよね。」

「そうそう」

「まず最初はシンプルなリングから」

「えくもつとデザインのカツコいい奴とかがいいです。」

「ダーメ！基本を覚えないと進めても直ぐにボロがでんによ何でも。」

「ちえ、分かりました．．」

「平面の細い板を加工するところから行くぞ。」

「あん、待って下さい。」

「この丸棒に板を乗せながらハンマーでコツコツと少しずつ叩いてく、こうだ。」

先輩が手馴れた感じで細いシルバーの板をコツコツと叩いて形を作っていく

「流石に上手い。」

「どうだ、分かるか？一色。」

「はい、えくと、こうですね？」

「うん、そうだ飲み込みいいなお前。」

「へへっ、褒められちゃった。」

「あく気を付けて!」「あつ! やっちゃった?」

「大丈夫だ、傷が付いてないからそのままで・・・」

やだ・・・先輩が直ぐ横に、高校時代にちよつと意識した時があるけど

葉山先輩が本命で追っかけてたし毎日会っても全然そんな気にもしなかったのに。

それに凄く頼もしく見えるし・・・

「そう、あとは溶接してと。」「はい!」

どうしてだろ? 随分と前からこんな楽しいと思っただ事がないや。ぶつきら棒に教えていく先輩は高校の時と同じだけど優しい感じがする。

「溶接は俺がするから取り合えず見てて、火を使うけど大丈夫だ。」

それから磨きの仕上げを手伝って貰って初めて自分で作ったリングを指にはめてみた。

久々にジーンときちやった。

「どうだ、自分で作ったリングのはめ心地は?」

「先輩、これ気に入っちゃいました! 可愛いし!」

「シンプルな物程、飽きがこないしな。」

「普段使いにいいし大事にしますありがとうございます!」

出来上がったばかりのリングを右の薬指指にはめ何時までも眺めていたい気分になった。

「遅くまで居てすみませんでした先輩。」

「先輩も帰る時間じゃないですか?」

「俺? 俺はこのお店の上で寝てるから帰らないよ。」

「えっ? 上ってスクールじゃないですか、教室の中で寝てるの?」

「違うし、その上からワンルームマンションになってんだよ。」

「はっ、もしかして誘ってませんか? リング一個で釣れる安くて軽い女じゃないですよ!」

もう少しゆっくり時間を掛けて下さいね、ごめんなさい。」

「はあくはいはい、時間だからお店しめるから。」

「ありがとうございます! また来ますね。さよなら。」

「おう、気を付けてなっつて？また来るつてまさか…」

駅まで小走り駆けで弾んだ心を押さえ帰り道を急いだ。

懐かしかった・・・そう高校時代に毎日、先輩の部室に遊びに行つて先輩と話すのが日課だった。先輩が卒業して奉仕部も無くなつてあたし1人になつちやつて暫く元氣無くて寂しかった。

でもあの時のままの先輩がいてくれた。

遊びに行つちやいますね、先輩と会えて嬉しいです。

食べて下さい、先輩

今日は朝から楽しみな日、そうスクール初日の日なの。

あれから先輩のお店には仕事の残業で行ってないから楽しみで。

「失礼します〜お疲れ様です〜!」

会社を急いで飛び出しREALに到着した。

「初めまして〜一色です〜今日からお世話になります〜!」

他の生徒さん達と顔を合わせ講習を受ける事に。

「一色さんは最初これね。」

「あれ?この前と違いますよ先輩?」

「これがスクールの教材用シルバーでこの前のは売り物の用の俺が加工するシルバーなのよ。」

「こっちの方が少し加工しやすいんだ。まっ、変わらんけど。」

「なにになに?『先輩』って先生とどう言う関係なの?」

隣のおばさんから、ねちっこく聞かれちゃった。

「嫌だなあ〜比企谷先生が高校時代の先輩だったんですよ〜ねえ先輩?」

「一色さん、ちゃんと教えた通り加工してね。」

「富田さんはこの前の作品、いい出来でしたよ。次の作品が楽しみですね。」

「あああ〜先生ったら上手なんだから、そう言えば先生の展示発表会デザインが凄く良かったって評判だったのよ!」

あたしも先生の教室通ってるってみんなに自慢出来るんだから次の作品も期待してるわ〜。」

「富田さんに期待されちゃあ頑張らないと、ありがとうございます」

先輩ってこんなに人当たり良かったかしら?上手く行ってるみたいだし…でも評判いいんだ、

やっぱり品物の質感とかいいと思うし昔から几帳面だからかな。

？「遅れてごめんなさ〜い！」

遅れて来た生徒さんのようだ、

「ヒツキー遅れてごめんねえ〜」

えっ？あたしの知る限り先輩を「ヒツキー」と呼ぶ人はただ一人だけ…そう結衣先輩だけ？…えっ？

その女の人は華やかなカジュアルファッションに身を包みスタイルが良く明るく優しい感じがする人だった。

「え〜結衣先輩ですか？お久しぶりです〜！覚えてますか？一色です、一色いろはですよ！」

「えっ？いろはちゃん？いろはちゃんなの？久しぶり〜！どうしたのこんな所で…あ、いろはちゃんもヒツキーの教室に入ったんだ。」

「そうなんですよ！偶然お店に入ったら先輩が居てビックリしちゃいました。前々から興味があったしやってみようかなって！」

「そっかあ、いろはちゃんも通う事になったんだ。…でも昔の友達にまた会えて嬉しいよ元気にしてた？」

「ええ、なんとかです。結衣先輩も元氣そうですね。」

「あの〜積もる話もあるっうか、時間無くなるしリング作ろうよ？」

「あっ、ヒツキーごめん…」

「先輩、折角の再開で盛り上がってるんですから多目に見て下さいよ。」

「ダメです、他の生徒さんに迷惑だからね一色さん。」

「あっ、そうでしたごめんなさいです。」

クスクスと他の生徒さんに笑われちゃった。結衣先輩にも迷惑かけてやって後で謝ろう。

「さあ、今日はここまでにしときましょう。」

出されたカジユアルリングの課題工程を何とかクリアして今日の教室が終了した。

「ありがとうございました。」

教室が終わり結衣先輩と目が合ってお互いに吹き出した。

「懐かしいですね〜結衣先輩！今は何してるんですか？」

「あたしは近くの保育園で保母さんかな。いろはちゃんは何をしてるの？」

「いいですねえ〜あたしはしががないOLなんですよ、クスン。」

「そんな事ないよ〜あたしは計算とか事務が得意じゃないから。」

「でも結衣先輩、素敵です。保母さんなんて結衣先輩にとっても合つて優しそうで安心して子供を任せそう。」

「えへへ〜、やだあ〜いろはちゃん、褒めすぎだよ〜恥ずかしいな。」

「由比ヶ浜、一色のリップサービスなんだから図に乗るなよ。」

「先輩、そんな事ないです！結衣先輩は凄く素敵で可愛くて羨ましがりますよ〜。」

「そう言ういろはちゃんだつて変わらず可愛いし会社でモテるんじゃないの〜？」

「全然なんですよ〜彼氏もいませんし募集中なんで…」

先輩の方をチラ見したけどガン無視で片付けしてるわ。酷くないですかあ？もう！

代わりに結衣先輩が微妙な反応を。

「結衣先輩は彼氏さんとかいるんですか？」

聞かれないと思つたのか肩がピクンとしてる。

「へっ？あたし？あははっ…それがいないんだよね〜」

なぜか先輩の方をチラチラと気にしてる。結衣先輩ってまだ先輩の事追っかけてるの？

先輩達3人は高校時代、結局付き合わないで友達関係を保つた…

あたしもそれは知っていたが卒業後の関係までは聞いていないし年月も過ぎていった。

未だに微妙な関係を大事にしているんだろうか。

「あの…雪ノ下先輩はどうしてますか？」

「えっ…うん、ユキノンは…あははっ…そのう、葉山君とね…」

「えっ、それって結婚とか？ですか。」

「うん…まあ、大学出て直ぐ結婚しちゃったかな、それから葉山君の仕

事で一緒に海外へ行ってるよ。珠に帰ってくるけどね、ははっ。」

「知らなかったです、でもお二人が幸せならいいかも知れませんね。」

「…そうだね、ははっ。」

「結衣先輩なんか気を使ってるんですかあ〜？」

「だっていろはちゃん葉山君好きだったでしょ？」

「やつぱり…大丈夫ですよ何年経ってると思ってるんですかあ〜嫌だなあ〜。」

「だよね！でも親が決めた結婚とかで色々あったみたいで…それにね…」

「それに？」

「ううん何でもないよゴメン！あたし今日は用事があったてすぐ帰らなきゃあいけないんだ。次回ご飯でも行こうよ、

いろはちゃん！じゃあ、またね。ヒッキーもバイバイ。」

「はい！結衣先輩も気を付けて、さよならです〜」「おう、由比ヶ浜く気を付けてな。」

バタバタと慌ただしく帰って行った結衣先輩の言葉尻に引っ掛かりを覚えたけれど、あたしの気のせいだよな？

「先輩〜帰っちゃいますよ〜！」

「お〜お疲れ、帰っていいぞ、じゃな一色。」

あたしの方に顔を向けもせず知らん顔でリユーターを使い品物を作ってる、相変わらずなんだから！

「むう〜、そうあっさり言われると何か嫌な感じがします！先輩、あたしお腹が空きました先輩は

お腹空かないんですか？食べに行きたいと思いませんか？」

「腹は空いたが後でコンビニでも行ってパンでも買うよ。」

「へ？毎日そんな物しか食べてないんですか？」

「仕事に集中すると食べる時間とかバラバラになるし面倒だからな」

「ちゃんと食べないと駄目じゃないですか！」

「お前は俺の母ちゃんかって、いいだろ生きてるんだから。」

「何ですか、付き合ってもないのに女房呼びなんで早すぎます。ちゃんと順番を守って下さい、ごめんなさい。」

.....

「はい！野菜炒めと玉子焼きにインスタントのお味噌汁と、『さとうのご飯』……こんな物しか

出来なくて申し訳ないですけど食べて下さい。」

食べに行こうと誘っても『手が放せないから』の一点張りで動かない先輩を置いてすぐ近くのコンビニに

駆け込んでスクールにあるミニキッチンを勝手に使い先輩に簡単な料理を作った。

「俺の事なんかほつといて帰ればいいのに……」とか言いながら「美味しいな」とか

「そう言えば一色は料理得意だったな」って言ってる。

先輩覚えててくれたんだ……お世辞でも褒めてくれると嬉しい。

「一色、遅くなったな……その、ありがとな。美味かった。」

「この前工房で教えて頂いたお礼です、先輩。」

「お礼される事はしてないが？悪かったな。」

「またご飯食べてなかったら作ってあげますね先輩！」

「そんな気を使わなくていいから申し訳ないから止めてくれ。」

「ちやんとご飯食べるのならいいですけど、またやりますよ？」

「分かったから、ちやんと食べるから。」

「それから、今度ご飯食べに行きましょうよ……」

「お前とか？」「他に誰がいるんですか？」

「……………」

「……………」

「分かったよ、あんまり高いところはダメだぞ。」

「はい、先輩！」

仲直りの紅茶

「聞いて下さいいよく先輩！あたし納得出来ないんですからあ〜！」

「何で一色、お前の会社の愚痴を俺の工房で聞かなきゃあならんの？俺、

「仕事なんですよ。」

「もおく昔から先輩はあたしの話も聞いてくれてたじゃあないんですか？」

「それにアクセも買いに来てるんだからお客様なんです〜！」

「あく分かったから…これ仕上げたら、一息ついて聞くから待ってろよ。」

ふふっ、せ〜んぱい？昔から先輩は優しいですね今日も甘えに来てごめんなさい…。

「会社のOLに対する福利厚生が問題ありと上司に言っても取り合ってくれない、

嫌なら辞めろと？」

「そうなんですよ！酷いと思いませんか？パワハラです、パワハラ！」

「まあ、俺も雇われの身だから人の事は言えんが難しくないな。

会社に組合無いのか？相談するのも手だぞ。」

「ある事ありますが同族経営の会社でして組合が弱いみたいだな」

「ふくむ、組合活動をやり過ぎると民間企業は居づらくなるし出世の見込みも
まずゼロになるからな、ましてや女だとこれ以上の嫌がらせがあるかもな。」

「じゃあ、どうしろと？」

「黙って社畜として働くか会社に凄い貢献して出世してシステムをかけるか

経営者の息子とかと結婚して経営者側に立つか、自分で起業して経

営者になるか

もしくは別の会社に転職するしかないな。」

「ぶう〜ですよ、社長の息子さんと結婚なんか死んだ方がましです。我慢するしかないんですかね。」

「それ絶対社長に言うなよ、トラウマになって死んじゃうから。仕方ないな、

みんな我慢してるぞ。」

「先輩はそれで満足なんですか？」

「生きて行くためには仕方がない俺も同じだ。」

「あくあ、詰まんないな…先輩は好きな事やって働いてるし由比ヶ浜先輩も手に職付けてバリバリやってるみたいだし…あたしも好きな事して働きたいな。」

「アホかお前は？上辺だけで判断すんなよ、何が好きな事やってだ？そんな甘い

もんじゃねえぞ！由比ヶ浜なんか自分の不注意で子供が怪我したとかで親に土下座してお詫びしたり『熱を出したのはお前のせいだ』とか言われても泣き言わずにアイツは

頑張ってるやっつてんだ、会社の愚痴を暇潰しに昔の先輩の所へグチグチと言いに来る

お前とはえらい違いだ。仕事をなめるなよ。」

「えっ…そんな、あたしは只、先輩にちよつと聞いてもらいたかっただけなのに…」

「二色、買ってくれるのは嬉しいけど用事が無かったら来ないでくれ。」

「えっ？そんな…あたしそんなつもりじゃ…ごめんなさい！」

気が付いたら先輩のお店を飛び出してた。あんな言い方しなくていいじゃん！

なにさ自分だつて働きたくないとか言ってたのにさ！バカ、バカ！

…バカ！先輩のバカタレ、ちよつと愚痴っただけなのに酷くない？何で

いろはの事、そんなに責めるの？先輩の事、尊敬してるのに！あたしだけ悪者なの？

そりゃ先輩や結衣先輩は凄いいよ、でもさそんなに怒らなくてもいいじゃん、

フンだバカハチ！先輩なんか大くキライ！

ウチに帰るなり冷蔵庫にあつたビールを一気に煽り「ウプツ」と言いながら

ポツリ、あく先輩怒らせちゃったしもう教室に行けないな…楽しかったのに。

明日、謝りに行こうか…でも…でもさ、行き辛いし。

どうしよう……

憂鬱になりながらお風呂に入り髪にドライヤーを入れてるとスマホに

着信が…先輩からだ…恐る恐る開けて見る…

『さつきは言い過ぎた、すまない。満足に聞いてやれずに悪かった

比企谷』

やっぱ、先輩だ…あたしこそ、ごめんなさい！

涙がポロポロ溢れ出した。

先輩に直ぐに謝りたかった、スマホを握りしみながら連絡を。

先輩に電話をしたのは初めてだ。

5回目のコールで先輩は出てくれた。

「もしもし？比企谷ですが？」

訝しげな声でもそりと電話口に先輩はでた。

「遅くに…ごめんなさい、一色です。」

「一色か？遅くにどうした？今日はその…悪かったな。」

「謝らなくてはならないのはあたしです！先輩！今日は

すみませんでした！」

涙が溢れて来る…先輩に甘えてばかりで、今日はそんなあたしを叱ってくれたのに逃げ出して本当に恥ずかしくて穴があつたら入

りたい

気持ちで一杯だ。

「一色が会社でOLの不満を代表して言っているのが後から分かってな、

個人の不満だけじゃ無く会社を良くしたい愛社精神も感じられたから

俺の早とちりもあるし言い過ぎたと反省してる…すまなかった。」

「先輩…ごめんなさい…ありがとうございます…あたし、あたし…」

「ああ、もういいから…分かったから。」

「ダメです！あたしは先輩に甘えて逃げ道にしていました。お店に行けば

先輩がいるし話を聞いてくれるし楽しいし…ぐすつ。」

「そうか…こんな店でよがったら何時でも来ていいからな。」

「そんな事言ったら…怒らないんですか？また先輩に甘えますよ？いいんですか？」

「その時はまた叱ってやるからいいだろ。」

「いいんですか？本当に？毎日行っっちゃうかもですよ。」

「それは困るし頼むから程々にな。」

「今何時でも来て良いって言ったのにぐすつ。」

「今のはあざといから嘘泣きだな？却下で。」

「ふふつ、許してもらえて嬉しいです先輩！」

「ああ、やっといつもの一色だな…じゃあ切るぞ、一色。」

「ありがとうございます先輩、お休みなさい。」

「おう、おやすみ。」

.....

次の日、REALの前まで来たけど入りにくいな…あくん、どうしよう。

でも悪いのはあたしなんだし兎に角、先輩に謝らなくちゃ！

「ちりいくん」とドアを開けるとチャイムが鳴る、やけに今日は音が

きく聞こえる。

「いらつしやい…」何時もの先輩の音が工房からする。

「……………」

声掛けなきやあと思っても中々でない。

「あの…」

「んっ?どうされました…一色か、どうした?」

ぶつきら棒だけど何時もの優しい先輩だ。

「先輩…昨日はごめんなさい。」

気が付いたら深々と頭を下げてた。

「なんだ、昨日済んだ事だろ?それより今出来た新作だけど 見てみるか?」

この人は優しい…みんな引かれて行くのか、今になって身に染みる。

! こんなあたしだけで甘えていいですか?本気になっちゃいますよ

涙が一筋頬に伝う…

「あたしが見ていいの?」

「今回ののは一色に似合いそうだったしな最初からお前に見せようと思ってた。

どうだ、試してみるか?」

それはシルバーとゴールドで出来た小さなプチクロスで先輩が作ったなんて

考えられない程、可愛い物だった。

「はい…」

「ほれ二種類あるがどれから試す?」

「先輩を選んで下さい…」

「じゃあ、こっちはどうだ。」

「はい…着けて下さい先輩。」

「バツカ、自分でできんだろ?」

「泣かした罰です、先輩に着けてもらいたいです…駄目ですか?」

「俺がか?…あく分かったよ!これでいいんだな?」

「はい！」

セミロングの髪をアップにし、うなじを先輩に向けて着けてもらった。

プチクロスは白くて細い首元で可愛く輝いた。

「よく似合うな。」

「えくもつと褒めてくださいよ、『いろはちゃんは何着けても可愛いな』とか？

「ないんですか？」

「あく世界で2番に可愛いよ〜」

「何ですか感情がこもってないし2番って？」

「1番は小町だからな。」

「あははっ、先輩のシスコン〜」

「うつせ。」

「でも、これ可愛くて素敵です！あたし欲しいから買います。幾らになるんですか？」

「まあサンプルだしモデル代だ、サービスしとくよ。」

「そんな悪いです…コンビだから高いんじゃない？」

「その…何だ、よく似合うし…罪滅ぼしと言うか、それ、いい出来だと思っから大事にしるよ。」

「でも…もう…何ですか優しくして…もう少し、もう少し優しくされたら落ちちやいますよ、頑張っして下さい先輩…。」

「分かった、分かった。」

「……………先輩」

「ん？」

「ありがとうございます。」

「レモンティー淹れるから飲んでくか？」

「はい！先輩、手伝います！」

二人で淹れる紅茶の香りが工房に広がった。

ライバル？

いつものように先輩のお店に顔を出して工房に入れてもらう。

あれからスクールの日じゃなくても工房で彫金を教えてもらう事が多く数点の

オリジナルも作ったりして楽しくやってる。

「ねえ、先輩ちよつとこれ。」

「んっ、どした一色？」

「このワックスってこんな使い方いいんですか？」

「うん…いいぞ、上手くなつたな、一色。丁寧にもつてるとこも後々の出来に

かわるからこの調子でな。」

「はい、です！」

敬礼して「テヘペロ」しながら小首を傾げウインクね！

「はいはい、可愛いよ〜」

「もおうちちゃんトリアクションして下さいよお〜」

無視して溶接加工してる先輩を横目にブーブー言いながらワックス仕上げを

してたらお客様が入って来た。

『ちりいーん』とチャイムがなり入って来たのは女子大生風で長い黒髪とカジユアルなファッション、スタイルも良くパンツが良く似合うとっても綺麗な子だった。

「いらっしやいませ〜！」

あたしがお店に出てお客様の対応をした。先輩の代わりにちよつと店番やつたり

したりしてね。

「今日はどんな物をお求めですか〜？よかったら試して下さいね！」

元気良く対応して微笑んでみた。

「今日…八幡は居ないの？」

「えっ？八幡って…」

「店長の事よ、アルバイトさん。」

素っ気なく言われてびっくりしたけど、何なのこの子？先輩の事『名前呼び』って。

「あはっ、少しお待ち下さいね。」

工房に入り一生懸命、溶接をした先輩に聞いたです。

「ちよつと先輩く、今来ているお客様が先輩に用事なんですって。髪が長く

スツゴく可愛い子です！先輩の事、『八幡』って名前呼びですけど、どうします？追い返しませうか？」

溶接してた先輩は顔を上げてやっところつちを見た。

「ん〜？お客さんか？今行くから。」

溶接したばかりの品物の出来を確認しながらエプロンを外し店先に先輩は出て行った。

「いらっしやい、ご用はなんだった…何だ留美か。」

「何だつてはないよ、八幡！」

「久々だな今日どした？大学の帰りか？」

「せっかく来て見たら新しいバイトさんなんか入れちゃって景気がいいこと。」

私がバイトしたいって言った時には断ったくせにどう言う事よ！

「バツカ、お前？家遠いだろが。それに受験前だったし…」

「お前じゃない、留美！」

「せくんぱい？この子とどう言う関係なんですか？何で先輩の事、『八幡』って名前呼び何ですか？何で先輩も『留美』って名前呼び何ですか？」

「ちよつとバイトさん？私が八幡と話てる時に割り込まないでくれる、

大人しく店番でもして頂戴！」

先輩の顔が引き吊り脂汗をかき出だした。

「あのお君達ちよつと俺の話頼むから聞いてくれる？」

「話って何よ!!」

.....

「まっ、と言うわけだ。」

「先輩がそう言うのなら信じますけど…」

「八幡が言うのなら分かった…」

怒ってる二人をなんとか宥めて先輩が二人の関係を簡単に説明しながら紹介した。

「留美、覚えるだろ？ほらクリパの演劇でお前が主演を演じた時に主催した生徒会長だった『一色いろは』だよ、俺の高校の時の後輩で今はOLやっつててウチのスクールに通っててもらってるお客さんだ。」

お客さん…もつと言い方あるんじゃない？

「どうも…」

「一色、留美を覚えてるだろ？ほら、クリパの演劇で主演をやったもらった当時小学生だった鶴見留美だよ。今は大学生になってるが高校の時に俺が家庭教師のバイトで2年位教えた事があったんだよ。ちよくちよくお店に買い物に来てくれるんだ。」

「へへあの時の留美ちゃんなんだ。久しぶりねくでも先輩？何で家庭教師まで

やったの？もしかして先輩つてロリコン？」

「あのなお前、偶々偶然派遣された家が留美ん家だったんだよ。まあ、留美は勉強割と出来たから楽だったけど。」

.....

「八幡とは私が小学校時代からの幼馴染みで私のお兄さんみたいなものなの、

私がハブられてる時に助けてくれたのも八幡だし高校の時再会した時は

運命を感じたわ。八幡と私は赤い糸で繋がっているんだって。」

「ちよつと、先輩いいかしら？」

「ハア〜？何言ってるんの留美？」

「なに？事実を言っただけもりよ。」

「まあ、小学校時代に知り合ったのは間違いないが家庭教師で行った時は

ろくすつぽ口も利かないし問題集やってるだけで其の内、飽きてマンガ読んでたろ？」

「うっさいわね、八幡も時間まで一緒にマンガ読んでただけじゃない！」

「いつも何処か遊びに連れて行って、しつこかったな。」

「1回しか連れてってくれなかつたくせに。」

「バツカ多いくらいだ。」

「全然少ないよ！最近じゃあ忙しいとか言ってる連絡もくれないし、

来て見れば工房に女の人連れ込んでるしバイトもさせてくれないし、

酷いよ！」

「あのな〜さつきも言っただけ、留美の家は少し遠いし高校時代は無理だったろ？」

一色はあくまでアクセススクールのお客さんだぞ？偶に工房で指導する事が

あるが留美が勘ぐる様な仲じゃないよ。」

「だと良いんだけど……。」

何？この浮気現場で言い訳してる旦那さんみたいな先輩は…それに

あたしの事はお客さんって…そりゃあ、何もありませんよ今のところ。

でも、もう少し言い方ついうもんがあるでしょ？ムカつく！

「あらあ〜せ〜んぱい！ちよつと酷いじゃないですか、

あたしと先輩の仲ってそれだけじゃないですよお！」

「高校で一緒に過ごした時間なんてほぼ毎日じゃあないですか、それに責任とつてくれたし

イベントの時とか遅くまで一緒だったしディスプレイニールランド

も一緒に行きましたよ？

デートだって…きや、先輩！」

「ちよつと、責任ってなに八幡…。」

「バカか？一色、お前が一年生で生徒会長になったサポートとしての責任で

生徒会関連の用事をもつて奉仕部の部室に押しかけて来てただけだろ？雪ノ下や

由比ヶ浜もいたし俺一人だけじゃないぞ！

それにディスティニールランドもみんなで行ったんだ！」

「でも、デートは行ったんだ…。」

「1回しか行ってない！それも学校で作ったミニコミ紙の市場調査でだ！」

「本当なの？」

「嘘言つてどうする。」

「ふうん、今回だけは勘弁したげる。でも、次は無いから。」

「あのね、2人とも何張り合つてんの？頼むから。」

「だって…八幡が留美の事構つてくれないし。」

「だから、作品展の出品で忙しいから遊んでる暇は無いと何度か

言つたら？偶に店先で話すのはいいがバイトを雇う程、予算はないから

無理だからな。」

「じゃあ、スクールに通えば八幡に会えるんだ。」

「留美は俺に会うために趣味でも無い事が出来るのか？それにお金も

掛かるぞ？。」

「パパに頼んでお金も出してもらおうから！」

「そんな金で来てもらつても俺はちつとも嬉しくないな。」

「何で…私だとそんなに嫌がるの？」

「留美の意思、自分が無いじゃないか。そんなの俺は嫌いだし

嬉しくもない。」

「そんな、八幡に会いたいだけなのに…酷いよ。」

「駄目だ、相手に合わせるだけじゃ直ぐにボロで出るし面白くも無い。

自分の稼いだお金で自分の為になる事をやるんだ。」

「分かったわ…、八幡がそうしろって言うのなら…。」

「おう、機嫌が直ってくれて良かった。」

「良くなった訳じゃあないから…勘違いしないで八幡の嫌がる事を

しないでくださいよ。」

「そうか、済まなかった。」

「ねえ、お茶淹れるから飲んでいって留美ちゃん！」

「一色さん、ごめんなさい…ご迷惑かけました。」

「いえいえ、大丈夫だよ。あたしも最近、先輩に会社の愚痴をグダグダとこぼして

叱られたばかりだから何も言えないの。」

「本当だよ、ほら先輩に聞いてみて？」

「あくあつたなそんな事が。」

「先輩って愛想がないじゃん？だけど、叱ってくれる時はくれるし優しいじゃん！」

「うん…一色さんも？」

「えっ？………そうかもね。」

「負けないよ…。」

「じゃあ、お互いにライバルだね、お互いに頑張ろうね！」

「…手強いけど負けないから。」

「あたしも負けないよ。」

二人で八幡の背中を見ながら微笑みあった。

レモンティーの香りの中、コツコツと打つ八幡のハンマーの音が心地よかった。

結衣の告白

「ねえ、いろはちゃん今度の土曜日って空いてる?」

「へ?土曜日ですか?お休みです空いてますけど…(って言うか先輩のお店に来て彫金しに来る

つもりなんですけど…なんて結衣先輩には言えないなあ)」

スクールでいつも隣に座る結衣先輩が尋ねてきた。

「あのね、ユキノンが帰って来ててご飯でも食べに行こうって事になったの。」

それでヒツキーといろはちゃんもどうかなって。」

「わあく懐かしいです!是非行きたいです!あつ!先輩は行くに決まっていますよね?」

「あはつくそれがね…」

「あつ?雪ノ下が帰ってる?そうか…まつ、『元気で頑張れよ』と言ってたと伝えてくれ

。俺は忙しいから行けない。」

「何ですか?久しぶりに雪ノ下先輩が帰ってきてるんですからみんな、食べに行きましようよ!」

「行きたければ一色と由比ヶ浜二人で行けばいい。」

「もおく何でそんなに嫌がるんですかもぅ?」

「いいだろ俺の勝手だ…」

「そんな、せっかく結衣先輩が誘ってくれてるのに何で…」

「……………」

「分かりました、結衣先輩と二人で行って来ますから後で来たいって言っても知りませんからね!」

「だから、いいと言ってるだろ?」

「分かりました!もう頼みません!」

スクールが終わった後、結衣先輩と喫茶店に入りお茶をしながら先輩の対応に悪口を

「先輩があんなに薄情者だったとは知りませんでした！がっかりです、せつかく結衣先輩が

誘ってるのにあんな言い方して鬼です、人でなしです、悪魔です、もう先輩なんか大嫌いです！」

「まあまあ、ヒツキーのは何時もの事だから怒らないですよ、いろはちゃん。」

「結衣先輩は怒らないんですか？全然興味なさそうに断って許せないですー。」

「まだヒツキーは…」

「えっ？」

「まだヒツキーは自分が許せないのかも…あたしも空気読むの下手になったな…。」

「結衣先輩…？」

.....

「いつか分かる事だから言っちゃうね…ヒツキーがユキノンに会いたく無い理由。」

ミルクティーのカップを両手に持ち俯き加減にポツリ、ポツリと結衣先輩は

重い口を開き話し出した。

「ヒツキーとユキノン、そしてあたしは高校を出ても互いに付き合う事も無く

大学時代もいい仲間として友達として付き合ってたの… だけど、ヒツキーとユキノンは

両思いでずっとお互いを好きだった…あたしとの関係を壊さない為に

隠し合っていたんだと思う。」

「ある日、雪ノ下家と葉山家の間で縁談が纏まって葉山君と婚約が決まり

大学卒業と同時に結婚して葉山君と留学先に一緒に行く事になってしまった。

結婚間近…ユキノンはヒツキーに『もし、あなたが私と逃げる事が出来るのなら

全てを捨てて一緒に逃げて』と頼んだの。」

「ヒツキーは…結局、結婚式までにユキノンを迎えに行かなかった…普通に無理だよな？」

そんなの。でも、ユキノンはヒツキーに来て欲しかったんだと思う。」

「あれから、3年の月日が経ってユキノンは笑って話せる様になったみたい…。」

「あたしもまた昔みたいに少しは3人で話が出来る様になればと思って聞いたんだけど

余計な事をしちゃったみたい…。」

「ヒツキーの立場になって考えれば会えないよね…あたしバカだから…」

「そんな事も分からないから選ばれなかったんだと思う。」

ポロポロと涙を流しながら結衣先輩が話をする。

「そんな事が…でも、結衣先輩の気持は…」

「ううん、もういいの…。」

「何が…?..?..」

「あたしね、諦めたのヒツキーの事…ずっと好きだったけど、大好きだったけど

諦める事が出来たの。」

「えっ?..」

「でも、先輩のそばにいたいからスクールとかに通ってるんじゃないんですか?..」

「あたしだって女だもん、綺麗な物とかアクセ好きだからそれにヒツキーが教えてくれるのなら

「通いやすくてね……」

「あたしね……一年くらい前から大学時代の先輩とお付き合いですよ。ようになって」

「来年の秋に結婚しようと言われてるの。」

「……先輩は知ってるんですか？」

「うん、知ってるよ。『そうか、由比ヶ浜が結婚？まじか……彼氏さん胃袋大丈夫か？』」

「だって、失礼しちゃう！」

『「あたしだって、ユキノンに料理大分と教えてもらったし家でも作るようになって」

「お母さんからも少しは褒めてもらえるようになったんだから！」』つ

「言ってるの。」

「そうだったんですか……。」

「うん、そうなんだ。」

「いろはちゃん、ヒツキーの事……頼むね。」

「えっ？あたしは……そんなんじゃない？」

「ヒツキーの事好きなんですよ？」

「……好きです、先輩の事大好きです。」

「難しいぞお、ユキノンとあたしの二人係で落とせなかったんだから！」

「攻略が難しい程、落としがいるじゃないありませんか。」

「あははっ、そうだね！いろはちゃんは、昔から難易度が高い程、

燃えるタイプだもんね。」

「実はそうなんです！」

……

土曜日、お昼のランチを駅前で食べる事になり楽しみにしていた。久々に3人で会うのなんて何年ぶりだろうか。当日駅前のカフェに

到着し再会を喜び合った……がある変化が……

「雪ノ下先輩、おめでたなの〜!!」

「ええ、やっと安定期に入って悪阻も落ち着いたし楽になったのよ。

隼人に送ってもらって来たけど一色さんに『よろしく!』って、妬
けちゃうわ。」

「あははっ、葉山先輩と仲良さそうでいいですね!」

「最近じゃあ、休みの日には『僕が料理をするから雪乃は休んでろ』つ
て。

「っい、甘える事が多くなったわ。」

「うわ、ごちそうさまです!」

「じゃあ、隼人君の料理をどんどん食べて栄養つけなきゃあねユキノ
ン!」

「結衣だったら、でもウェイトのコントロールをしないといけないの
よ。」

「あく今はそうなんだってね。」

「ゆつくり、みんなと会いたいんだけれどごめんね。」

「それより、元気な赤ちゃんを産んで下さいね。」

「ユキノいいなあ、あたしも赤ちゃん欲しくなっちゃったよ。」

「結衣もあつと言う間よ、来年でしょ?結婚。」

「えへへっ」

「いいなあ、憧れちゃいます。」

「一色さんもね?」

「うん、いろはちゃんも。」

「あくあたしなんか、相手もないしまだまだで・・・」

「そんな事言ってるを取られてしまうわよ、大学生の子に。」

「えっ?知ってるんですか?」

「あの子がまだ高校生の時に一度会ってるし彼女も一途だから・・・」

『私の八幡を取らないで!』って凄かったのよ。」

「うん、相手に不足なしじゃん」

「結衣?それは『相手にとって不足なし』でしょ?」

「へっ?そうだっけ、あははっ。」

「ふふふっ。」

「はい、あの子には負けませんから…頑張りますね！」

「今度会う時には3人とも子供を連れて奥様昼食会になりそうね。」

「うわ〜今から楽しみだよキノン！それまでにいろはちゃんも間に合わせなくっちゃあ。」

「プレッシャー掛け過ぎですよ2人とも！これからなんだから！」

3人の会話は終わりを知らないように何時までも続き、別れ際は後ろ髪を惹かれ

それぞれの心に残るのであった。

先輩の為に

午後7時をまわりREALの閉店も近くなった頃あたしは
工房で夢中になって仕事をする先輩の横に座り出来る
綺麗なアクセをじっと眺めていた。

「何だよ、一色?」

「いえいえ、別にいく何でもありません。」

「.....」

「え〜い、鬱陶しいな話したいことがあれば言えよ。」

「ちゃんと聞いてくれますか? せ〜んぱい。」

「事によるが。」

「え〜ちゃんと聞いてくれないと駄目です。」

「あく分かったよ聞くから。」

「ふふ〜ん、やっと聞く気になってくれましたね。」

「で、なに?」

「今日、お店終わったらご飯でも行きましょうよ。」

「駄目。」

「え〜どうしてですか?」

「疲れてるから、それに面倒くさい。」

「じゃあ、今度の定休日の夜、ご飯食べに行きましょうよ!」

「展示会出品作品を後数点用意しないといけないから無理だ。」

「明日から徹夜続きになりそうだしな。」

「そんなに忙しいんだ...」

「すまん。」

「じゃあ、ご飯とかあたしが作りますから食べましょうよ。」

「いいよ、飯ぐらいカップ麺が何か食べるし何度も言ったが

一色に迷惑をかけれないし俺の仕事だから。」

「そんな...迷惑だなんて思わないしあたしだって先輩に色々

迷惑かけましたからお互い様じゃないですか?」

「ダメだ、そんな事お前に頼めない。」

「じゃあ、先輩。」

「なんだ？」

「ご飯、行きましようよ？約束したじゃあないですか。」

「いろはのお願い聞いて下さい。ダメですか…」

「……………あく分かったよ！しかし行くのは勘弁してくれ。」

「はい！美味しい物一杯作りますから一杯食べて下さいね！」

「簡単に済ませていいからな、一色だって仕事あるんじゃないか？

負担をかけれないから。」

「大丈夫ですよ、心配しないで下さい。」

「じゃあく何が食べたいですか先輩？リクエストありますか？」

「じゃあ、ハンバーグとか…」

「ぷつ、先輩子供みたい！了解です、腕によりをかけて作っちゃいますね先輩！」

「無理すんなよ一色、手間のかかる事は無しな。」

「了解です先輩〜！じゃあ、買出しにちよつと行って来ますね先輩！」

「あつ、今日はいいからなつて！もう行っちゃまった…」

先輩に頑張ってもらうためにも張り切っちゃいますね、先輩…

先輩の好きな卵焼きとお味噌汁も朝食に用意してと、献立も考えて

…うん、よし！

……………

「悪い、一色。」

「遠慮しないで下さい先輩。」

コンビニに駆け込んで取り敢えずすぐ作れそうな物をチョイスしてと…

いつものスクールのキッチンで出来るだけ待たせず早目に作った。

「こんな在り来たりな物しか作れなくてすいません。」

「バツカ、お前美味しいぞ。これなんか時間掛かったろ？」

「それ、お惣菜に一手間掛けただけで簡単に作れちゃうんですよ。」

「本当か？どうやるのよ、今度俺にも教えてくれよ。」

「ふふつ、あたしも実はお母さんから教えてもらったんです。」

一緒に作りましょうか先輩？」

「一色の母ちゃんは優しいそうだな。」

「はい、あたしのワガママ始終聞いてもらってますもん。」

「そうか…。」

何時に無く穏やかな顔の先輩が言葉少なに答えた。

「先輩のお母さんはどんな感じの人なんですか？」

「そうだな…余りうるさくは言わない人だな。俺こんなだろ？」

心配はしてたみたいだが自分の好きな事やれってな、後は

放つたらかしだ。」

珍しいな先輩が自分の事を言うなんて…

「優しい人なんですな、先輩のお母さんも。」

「そうだな…。」

スクールのキッチンで簡単に洗い物を済ませ先輩が

眠くならないように珈琲を煎れて飲んでもらった。

最近、余り甘くなら無いように砂糖を少な目に入れてるから

ブツブツ言ってるかな。

「美味かった、一色。ありがとう。」

「はい、仕事…頑張って下さい先輩、じゃあ、そろそろ

帰りますね。」

「ああ、遅くなるからな気を付けて。」

「はい…お休みなさい。」

「一色…。」

「その、なんだ…ありがとうな。」

「はい！」

.....

翌日の夕方「ちりいくん」と何時ものチャイムを鳴らしながら

REALに入ったなら先客がいた、またまた懐かしい顔…が」

「おお〜一色先輩？久しぶりですね〜何年ぶりかなあ〜！」

「わあ〜小町ちゃん〜久しぶり〜！」

「懐かしいなあ〜元気だった？」

「それはもう〜元気が取り柄の小町ですから〜つて、あれ？あれれ？
何で一色先輩がここに？はは〜ん、さては、ふ〜ん、成る程〜！
小町ピ〜ンときちやいましたよ〜！」

「あはっ、何を言っているのかな小町ちゃん？あたしは会社帰りに
先輩のお店のアクセススクールに通ってるのよ。」

「あのですね一色先輩？」

「へっ、なに？」

「今日はスクールお休みの日ですよ？」

「あははっ！あたしってウツカリして日にち間違えちゃったかな？」

「いえいえ、大丈夫ですよ邪魔者は直ぐ退散しますから安心して下さい。
い。

偶々、小町も仕事帰りにウチのゴミいちゃんが生きてるかなって
覗きに来ただけですから。」

「あはっ、相変わらず仲が良いよね2人とも？」

「いえいえ、一色先輩とウチのお兄ちゃん程ではないですよ？」

「イヤだ、ちよつと誤解だつてばあ〜小町ちゃん！」

ちよつどその時先輩が店先を覗いた。

「ん〜、なんだ一色かあ〜賑やかいから誰が来たのかと思ったぞ。

もう来たのか早いな。」

「ちよつとお兄ちゃん、一色先輩が折角来たのに『何だ？』はないで
しよ〜。」

「いつも来てるからな。」

「ふ〜ん、いつもなんだ？へ〜来て何してるのかなあ〜？」

「……………」

「別に一色はアクセススクールに来てるだけだよ。」

「ほお〜う、確かスクールは週一のはず〜いつも〜ふ〜ん〜。」

「あははっ……………」

「何だよ、小町？言いたい事があれば言えよ。」

「別にい〜、小町はこれで帰りますから後は若いお二人に
任せてと…。」

「なにお見合いの仲人さんみたいな事言ってるんだ？」

「そうだよ小町ちゃん、誤解だよ！」

「あつ、そうそうお兄ちゃん。お母さんがね、

『偶には彼女を連れて帰っておいで』って言ってた。」

『ほつとけ！』って伝えてくれ！」

『もうすぐ連れてくから待ってる』って伝えてるね！」

「バツカお前、何言ってるの？」

「じゃあ、お兄ちゃんまたね〜！あつ、それから一色先輩、

お兄ちゃんをヨロシクです〜！」

「あく小町ちゃん?!」

「ちりい〜ん」とドアを鳴らして元気良く小町ちゃんは帰って

行っちゃった……

「ははっ、小町ちゃんたらもう！」

先輩は頭をクシャクシャって手でかき回し何やら

ブツブツと言って工房に入り込んでしまった。

小町の後には可愛い女子高生の2人組がお店に「ちりい〜ん」と

入って来た。

「いらっしやいませ〜良かったら試して下さいね〜！」

楽しそうにアクセを試す女の子を見て小町ちゃんや結衣先輩達との思い出を

懐かしく思うのであった。

見てしまった．．

「もうすぐシルバーアクセ展示発表会ですね先輩？」

店内には軽い音楽が流れているが工房で2人、黙って作業をしている時に不意に展示会の事を思い出し行った事のないあたしは黙々と作業をする先輩にたずねてみた。

「ああ、親会社のオーナーから至上命令だからな『毎年二回あるフェアーを絶対に成功させろ』って、このイベントの人気如何で売上が左右されるしブランドも画一されるからな。」

「へえ、先輩が売上とか、何か変ですね？前は働きたくないって言うてたのに。」

「まっ、『働かざる者食うべからず』だな…俺が言うのも何だけど。」

「本当ですよね、休みもろくすっぽ取らず何で仕事出来る様になつたんですか？不思議です。」

「悪いその材料、金ノコで30ミリ2枚ほど切つといてくれ一色。」
「は〜い」

イベントの追い込みもあつて最近先輩の助手を勤めてる、って言うっても簡単な

前作業やお手伝いなんだけどね。

「あと、型取用のシリコンを100gを2つ頼む。」

「はい、先輩！」

「最初はな…」

「えっ？」

「就職活動とか俺には無理…と思って1人で出来る仕事探したのよ。そんで見つけたのが

コレでまあ、ハマった訳だな。」

「あんま、動かなくていいし基本1人で出来るし。」

「先輩にピッタリだったわけですね。」

「うむ、そうだ。」

「そのドヤ顔で言わないで下さい。」

「んで、今じゃ立派な社畜になった訳だ。」

「そんな、先輩は立派な仕事してます！お店の商品だって先輩のオリジナルの方が

売れてるし今販売中の星座シリーズだって凄い人気じゃないですか！」

「あれはオタク趣味の結晶だ、あれが無かったらとつくにクビだからな。」

「そんな…」

「世の中なんてそんなもんだ。」

「先輩は違います…クオリティを落とす事なくいい品物しか出さないし十分尊敬に

値します！あの小さなマリア様の慈愛に満ちた優しい顔立ちとかビーナスの美しい表情なんて他に見たことありません！」

「買い被り過ぎだ、オーナーからは『元がギリギリ取れるかの製品より、多少質感を落とし型取しやすく造形して外国に下請けをさせ増産し儲けたい、については量産の技術指導に行ってくれ』と言われてが断ってる。」

「あんなに頑張ってやってるのに…」

「それが現実だ、品質を落とすたくないからやるだけだ。」

「先輩。」

「なんだ？」

「頑張ってる先輩ってとっても素敵です！」

自分でも分からないうちに先輩が愛おしくなり手が先輩の背中に触れていた。

華奢で痩せてると思ってた先輩の背中は意外とガッチリとして広く見えた。

「おい、一色…まだ肩が凝る年じゃないから」

「えっ、あ…ごめんなさい。」

「バツカ、お前マジリアクションは要らないから。」

ヤダっ！あたししたら赤くなってる。何か言わなくっちゃ！

「なっ、何ですか急に！不意を突いて言い寄るなんて

反則です！もう既にときめいてますので後一押しです。後ちよつとなので

頑張つて下さい！」

「はいはい、分かった分かった。」

全然分かってない！バカ！・・・決めてるのに・・・

先輩の背中をペチンと軽く叩いてやった。

.....

「一色、今日は早目に上がってくれないか？」

「へっ、何ですか？今からすぐ食事の支度をしますから待つて下さいよ。」

「違うんだ、人と会う約束をしてるから引き上げて欲しいんだ。」

「ひよつとして留美ちゃん？でしたっけ、ロリコン先輩の大好きな留美ちゃんが

訪ねて来るんですね？ダメです！危険な匂いが一杯です！ヤバイです！そんなの絶対に嫌です！」

「あのな一色？何度も言うが俺と留美はそんな関係じゃないから、

その：：なんだ？近いところで幼馴染みかな、妹みたいな。それだけだ。」

「その幼馴染みとか妹って言うのが一番ヤバいんじゃないですか！」

「あくどうしてお前は俺の彼女面すんのよ？小町が訪ねて来るみたいなんもんだろ？」

「先輩だけですよ：：そんな気楽な事言ってるの。ここにもし奉仕部の二人が居れば

凄い事になってたでしょうね先輩？良かったですね♪」

「何だよそれ、だから違うから、それに留美ならお前に帰れとは言わないよ。」

「留美なんか可愛いもんだ…」

「えっ？」

「うちのオーナーが来るんだ。」

「お店のオーナーさん？」

「そうだ、今日は売上の報告もあるし定期視察もある。バイトなんか雇ってないのに」

お前がウロチョロしてたら俺がドヤされる。」

「分かりました先輩、ウロチョロせずに堂々としてればいいんですね？」

「あのなく違うから。」

「大丈夫ですよ、ちゃんと帰ります。」

「良かった…バイトさせろって駄々捏ねられたらどうしようかと思っただぞ。」

「へっ?どうしてですか。」

「一色、ウチのオーナーな物凄くおつかないのよ…お前なんかビビって」

オシッコちびつちやうくらい怖いんだぞ。」

「えく嫌だなく先輩ったら!セクハラです、パワハラです訴えますよくそれ。」

「……………」

「えっ?嫌だなそんなに?」

「…嘘だ。」

「最低く信じちやいましたよ。」

「まっ、そろそろオーナーが来るから。」

「分かりました、帰ります!帰ればいいんですよ。」

「そう拗ねるな。」

「だって…邪魔者みたいな言い方するんだもん。」

「そんなんじゃないから。面倒臭いし会わない方がお前の為かもな。」

いつか機会があれば会うかもしれないが…」

「それじゃあ、帰ります先輩。」

「今日もありがとな一色。」

「はい、じゃ明日またね先輩！頑張ってください。」
「おう、任せろ。気を付けてな。」

先輩ったら珍しく張り切って…

ふーっ、今日も一日終わったかなあ、急いで帰ろうとお店を出てしまつて

ポーチの忘れ物をした事に気が付いた。

まだ、出たばかりだからオーナーも来てないと思うしとりに戻る事にした。

REALの手前まで来た時もう既に到着したオーナーを乗せた車が

横付けされた車からオーナーが降りるところだった。

外車の運転席から降りたその人は品のいいスーツ姿にスラリとした美人…

あたしは知っている…あの人が誰かを。

そう…先輩はあの人の事をかつて悪魔、魔王と呼んでいた。

何故あの人がお店にあの人がオーナーなの？先輩があたし嘘を言つてあの人と会う為に

追い払ったの？どうしてですか先輩？

脚がどうしても動かなくなつてしまった…遠巻きにお店の様子を伺う、決してお行儀の

よくない先輩が嫌う行いだ。だけど気になつて。お店の中ではオーナーが楽しそうに先輩に話掛けている。先輩はいつもの様に無愛想にブツブツと言つてるようだ。

書類を見ながらオーナーは微笑みを浮かべ囁き掛けるような感じで話している。

先輩は黙って真顔のまま首を立てに振って頷いてるだけ…

もうここには居ていけない、心の中で誰かがあたしに帰れと言つて

いる気がした。

だけど、どうしても離れることが出来ずにいた。

あたしは見てしまった……

オーナーが先輩の頬にキスしようとしたのを……

先輩はキスしようとしたオーナーから咄嗟にはなれていた。

口を尖らせたオーナーが子供のように先輩に拗ねて

甘えるのが見えた。

そこまでを見ていたあたしはただ俯き一人家路に着くのであった。

先輩の疑惑

「お姉ちゃん、もう起きないと会社遅刻しちゃうよ?」

「いいの…今日は休むから。」

「大丈夫? 昨日から元気なかったし何かあったの?」

「ほのかは気にしなくてもいいから…」

「気になるよ、昨日まであんなに楽しそうにアクセススクールに通って昔の先輩とも

会えたって話してくれたじゃない。もしかして先輩と喧嘩したの?

「……………」

「…………元氣出して、いつでも相談乗るから言っただけ。」

「ありがとう…」

会社も休んじやった。

夕べの事が頭の中に余儀って眠れなかった…

先輩とオーナーがまさか…いや先輩に限って絶対そんな事は無い! って思いたいけど…

気持ち整理が出来ないよ…信じたいのに…あんなの見たら。でも先輩は嫌がってたし

オーナーがイタズラしたのかも。だけど普通あんな事やる?

パジャマに自室で丸一日籠城を決め込んで布団の中、塞ぎ込んでいたら

スマホに着信音が。

結衣先輩からだ。

「今日はスクールも来なかったしどうしたの? お休みの連絡も無かったし

ヒツキーも心配してたよ。具合でもわるいの?」

「心配をかけてすみません、大丈夫ですから気にしないで下さい。」

結衣先輩らしいや心配してメールをくれたんだ。

「ヒツキーと何かあったんだ？」

「べつ、別にそんな事はないですよ。」

先輩は鋭すぎる…

「凶星でしょ？」

返信に困つてると。

「ねっ、明日夕方、お茶でもしない？」

「でも…」

「少し話すと楽になるかも。」

「結衣先輩に甘えていいですか？」

「うん、任しといて！」

「はい！ありがとうございます、明日よろしくお願いします。」

……

「ごめんなさい、結衣先輩：忙しいのに」

「ううん、大丈夫だよ、いろはちゃん。それより悩み事？」

夕方、何時もの喫茶店で二人、珈琲を飲みながら遠慮がちに話してみた。

「あの…」

「ん？」

「あたし見ちやっただす…」

「なっ、何をみつ、見たの？いつ…いろはちゃん？」

「昨日、お店のオーナーが売上の報告と店舗視察があるから先輩に早目に」

帰るよう促されたんです…

「うん…」

「それですぐ帰ったんですが、うっかりポーチを忘れたのを思い出し、

まだ間に合うと思つて直ぐに戻ったんです。そこのお店で先輩とお店のオーナーが…」

結衣先輩は緊張感丸出しでテーブルから少し乗り出しあたしの次の言葉を待った。

「で、何があったのいろはちゃん！」

「オーナーが先輩の頬にキスしようとしたんです…」

結衣先輩の喉が『ゴクリ』となった。

「そしたら…」

「そしたらって…えく！ちよつと、いろはちゃん！」

「落ち着いて、結衣先輩。そしたら、される直前に先輩が避けたんです。」

「…：そつ、そう。でも何でオーナーがって、あれ？ヒツキーのお店のオーナーって、

確か…ユキノンのお姉さん、陽乃さんじゃあ…えく！どうして？」

「結衣先輩、お店のオーナーって誰かを知ってたんですか？」

「あくヒツキーから聞いてたしお店で2回程偶然会った事があるだけで最近は会ってないよ。」

「何でもヒツキーがこの仕事に就く時世話をしたのかな、『頭が上がりないって言ってた。』」

「先輩に避けられたら甘えるような仕草で拗ねてるんです…」

話を聞いてるうちに落ち着いて来たのか結衣先輩はやや真面目な顔で話始めた。

「あはっ、大丈夫だよ、いろはちゃん。ヒツキーを信じてあげてよ。流石にそれは陽乃さんの

イタズラが過ぎるけどね。」

「えつと、あたしもビックリしてそこまでしか見てないけど…でも先輩が変な事すると

思いたくありません。」

「うん！ヒツキーはいつも通りだったし昨日も『今日は一色の奴来なかったな、

由比ヶ浜のところに連絡なかったか？』って心配してた位なんだから！」

「えつ？先輩があたしの事心配してたんですか？」

「あはっ、いろはちゃん、嘘だと思うなら自分で確かめてね！大丈夫だよ」

「ええ、まあ…」

「ちゃんとヒツキーに聞いた方がスッキリするし、いろはちゃんらし

「よ。」

「はい！ありがとうございますー！」

「うんー！」

.....

昨日、結衣先輩に『頑張れ〜』って応援してもらって元気出たし夕べ、ほのかにも

『元気になったね』って言われちゃった。行き難いけど、先輩に聞かなくちゃいけないよね。

「こんばんは……」

ちりいくんと何時ものチャイムがなってドアを明けてお店に入っ
た。

「いらつしやい……おう、一色か。昨日は用事だったか。」

何時もの、無愛想な顔だけど先輩が今心配してくれたのかな？

「あたしがお休みしたから心配してくれたのですか？」

「そりや……まあ、なんだ……いつも顔出してる奴が来なかったらな……多
少はな。」

「あたし……あたし、おととい、見ちゃったんです。」

「あつ？何を見たんだ？お化けか？」

「先輩がオーナーとイチャついてるの……」

「お前、帰ったんじゃないのか。」

「ポーチの忘れ物を取りに直ぐ戻ったんですがオーナーが既に来てて
……それで、

オーナーが先輩にキスしようとして先輩が嫌がって逃げてるの。
オーナーは拗ねて

先輩に甘えるような感じでした。」

「……だから早く帰れと言ったんだ。嫌な物を見せちまう。」

「先輩は……先輩はオーナーの事が好きなんですか？付き合ってるん
ですか?!」

「……一色、アホな事言っていないで、さっさと支度しろよ昨日のスクー

ルでやった所見てやるから。」

「はぐらかさないで下さい！ちゃんと行って下さい先輩！」

「お前、見てんだろお化けを…。」

「えっ？」

「だから悪魔が来るから帰れって。あの人はな、ああやって人をおちよくったり

チョツカイ掛けたりが大好きな人なんだよ。だから会わせたくなかったんだよ。」

「でも…キスしようとしてたし先輩の事好きなんじゃ…」

「あの人が俺の事をどう思ってるかは知らないが…昔からオモチャくらいにしか

思っていないと思うぞ。」

「人をオモチャにしたりとか…面白がってキス出来るなんてどうかしてます！

先輩は許せるんですか！」

「あの人は不真面目な時はあんなだが経営者としては優秀だ…生粋の実力主義者だし妥協を

しない、俺だって何時まで雇ってもらえるか分からん。そんな奴に惚れると思うか？

「昨日も再三の警告だ…造形の工夫、要するに手を抜きながら品質を落とすな大量生産して

高く売れとな。最近じゃあ、悪魔じゃなくて守銭奴だなあれは。」

「じゃあ何でそんな守銭奴さんの所で奴隷みたいに働いてるんですか？」

「昔ながら世話になったしな…まっ、今の仕事に拾ってくれた恩があるからな、それだけだ…」

「今後、オーナーが視察に来るときは同席しますから。」

「何言ってるの…」

「オーナーが先輩にイタズラされない様に監視です。」

「何でそうなのよ！何にもないから絶対に！」

「本当ですか？絶対ですか？」

「あのオーナーだぞ…考えただけでも恐ろしくて眠れなくなるぞ、震えが止まらない。」

「本当かなあ？オーナー、メチャ美人だし…」

「バツカ、お前あんなに手を出してみろ雪ノ下や由比ヶ浜に殺される。」

「あと、もう二人にも確実に殺されますよ先輩♪」

「あつ、あのな一色？もうそろそろ…講習のところやらないか？」

「上手く誤魔化そうとしますね？せくんぱい！でも、サービスで乗ってあげます！」

「何のサービスだよ、全く。」

「さあ、時間無くなっちゃいますしご飯も作りますから急ぎますよ〜」

エプロンを着けて先輩に教えてもらうのが楽しくてついつい時間を忘れてしまう位だった。

信じて良かった〜先輩が無事で…お腹が空いて先輩よりこの日はご飯を食べて

笑われてしまった。

二人のアルバイト

今日は土曜日でお休みの日、午前中からREALに来て先輩のお手伝いを…と思ったのに。

「てか、何で留美ちゃんが朝からお店に居るんですか先輩？」

「あら〜一色さんがあんまり間に合わないから私が呼ばれちゃったんじゃないですか〜」

八幡にホントの事聞くの可哀想だよ、ねえ〜八幡！

鼻歌を歌いながらショーケースの拭き掃除をしてメチャクチャ機嫌が良いみたい。

『家が遠いから駄目だ』って断ってたのに嘘つき！

先輩の二の腕をつついた。

「予算が取れたんだよ。やっとな…この前オーナー来たろ？その時、何とかしてほしいと

言って貰ったんだ。一色のお礼分もあるからな。だけど、お前の会社にうちのバイト 収入が後々税金とかでバレないよう俺が立替えて払う感じにするから。」

「そんな…お金が欲しいから来てるんじゃないやありません、先輩を手助け出来ればと思ったのに。」

「それは俺が困る。」

「でも、お店からお金が出るんだったら有り難く頂きますね先輩！」

「相変わらずちゃっかりしてるなお前は。」

「ちよつと、一色さん？遊んでないでそのケース拭いてよね！」

「ゴメン！留美ちゃん。」

土日になると流石に忙しくなる。カップルが仲良くアクセスを選んだり彼女の

誕生プレゼントに男子高校生が緊張ぎみに何を貰ったら嬉しいか選んでほしいと

聞いてくる。最初当惑気味の留美ちゃんも慣れてきたのか笑顔で

予算と彼女が

どんな感じの子か聞いたりしてアドレスしてる。男子高校生も美人の留美ちゃんが

相手で喜んでるみたいな…

えっ？あたし？あたしは…そうよ、お店には顔をあんまり出さず先輩のサポートを。

「一色、お前はあざといから俺のサポートで。」

「どうせ、あたしはあざといですよーだ！」

アカンベーをして先輩に愚痴る。

「私は店頭より八幡のお手伝いしたいのにごめんなさい・・・」

「留美にサポートは無理だしな、その気持ちだけで十分だ。」

笑ってごまかしてるな先輩の奴！

その日の売上げは今までになく良いみたいで先輩もあたし達も喜んだ。

「こんな事なら美人の派遣バイトを土日だけ入れてもらおうようオーナーに

交渉するかな。」とか言ってる。

「ちよつと八幡と言う意味？私じゃ不満なの？」

「いや…留美は家が遠いしな…ははっ。」

「誤魔化さないで、予算確保したって言ったでしょ？毎週来るんだからー！」

「あ、いやね留美、毎週はきついから各週でいいからな。」

「いいの！予定なんか無いから安心して八幡。なんだったら泊まりに来ても

いいんだから！八幡のお手伝いが出るんだったら何でもするよ！」

「アホか…何でバイト泊まりがけで来るのよ。後でスケジュール組むから絶対に

無理はさせないからな。」

そう言っつて『ポン！』と留美ちゃんの頭の上に手を乗つけて戒めた。

「あん…八幡のバカ。分かったわ、言う通りにする。」

「頼むぞ留美。」

「うん…」

……何この雰囲気は？ヤバあ…留美ちゃんと先輩、ダメです、ヤバいです！

それに頭ポンなんて…あたしだってされた事が無いのに…！

「ちよつと先輩、その…いいですか？」

「ん？何だ一色、トイレか行つていいぞ。」

「違〜う！」

もう、先輩つたら絶対わざとやってるに違いない！

「あたしの予定も聞いて下さいね♪勿論、土日もお泊まりも気にしないで下さいね。」

何時でもOK準備完了ですから！

「はいはい、分かった分かった。」

何なのこの差は？あたしと留美ちゃんじゃあ天と地下鉄くらい差がついてるじゃないの！

…

6時に留美ちゃんはバイトを名残惜しそうに上がって行った。

「明日も頑張るからね八幡！じゅあね、そうそう、一色さんも八幡の邪魔を

しないように気を付けて下さいね♪ あと、用事が済んだらすぐ帰るようにして下さい。」

「一色が押されてるの初めて見るが何か笑えるな…ププッ」

帰って行った…留美の奴…覚えてろよ。横で先輩が苦しそうに笑ってるけど

何が可笑しいのよ全く！

「あとオーダー品仕上げれば今日のところはいいな、二人のお蔭で大分と助かった。」

展示会用の品物も後一点になったしすげー楽になった。ありがとな、一色も上がっていいから。」

「大丈夫ですよ、ご飯作りますから任せて下さい。」

「何言ってるんだお前だって疲れてるだろ？休みの日に出てきてるんだし無理を

させる訳にいかない。」

「せくんぱい、あたしは無理もしてませんし大丈夫ですよ。だけど…1つだけお願いがあります。」

「聞いてくれますか？」

「何だ？俺に出来る事でも無理な事はあるぞ。商品の横流しとか…オーナーに八つ裂きにされる。」

「先輩のアホ〜！ …………… 頭を…」

「えっ？」

「頭を撫でて下さい、お願いします。」

「それは…」

「今日、留美ちゃんにしてたじゃないですか！あたしにもして下さい、…撫で撫でして下さい。」

「いやっ…あれは、留美は妹みたいなの…」

「撫でて下さい…先輩。」

あたしは撫でやすいように目をつむり頭を下げ待った。

「あく今日だけだぞ！一色！」

「はい、お願いします…」

そう言つて先輩はそつとあたしの頭に手を置きゆっくりと撫でてくれた。

「んっ…」

「バツカ変な声出すなよ一色！」

「だって、気持ちいいから…これ絶対

病み付きになりそうです、次回もご褒美にお願いします！」

「だから、今日だけ特別って言つたら？俺が頭撫でるのは小町だけだ
けだ

…最近はさせてくれないけど。」

「さつき留美ちゃんにしたばかりじゃないですか。」

「留美は頭ポンだけで、つい出てしまったが撫でた事はないからな。」

「お前が最初だぞ。ホントだぞ！」

小町ちゃんはこんな気持ちいい事毎回してもらってるんですか……羨ましい。へへっ、

じゃあく得しちゃった！

「待ってて下さいねご飯直ぐ作りますから！」

「いいのか？じゃあ、頼む。」

二人のささやかなディナー、この時が一番好き……だってあたしの作ったご飯を

美味しくそうに食べてくれるんだもん。

「いよいよ、来週イベントですね先輩。」

「ああ、楽しみだ。」

先輩と取り留めの無い話をしながら食べる夜ご飯……いろはは、幸せです。

アクセイイベント

イベント当日を迎え前日の夜は何かと支度をし、大忙し大変でした。

「ショーケースの搬入とかは前日に親会社の仲間がある程度やってくれたから助かったな、去年は全部やらされたから死んだぞ。」

「商品展示も大変ですよ、こんなにあるんだし品出しだけでも結構な時間かかりますね。」

「大丈夫だよ、八幡私ができるから任せておいて、あつ、一色さんは掃除と段ボールの片付けをお願いね！」

「ちよつと留美ちゃん？一緒にやらないの？あたしが品出しすると不味い事、あつて？」

「だって〜一色さんのセンスより私の方がいいと思うしく、ねつ、八幡そう思うでしょ？」

「兎に角だ、仲良く綺麗にな。分からない場合は俺に聞いてくる事、喧嘩はダメしないように！」

「誰のせいで喧嘩になってると思ってるのよ全く…」

「ホントよね、全然振り向きもしないんだから…」

隣に来た留美ちゃんと並んで深い溜め息ついた。

「さあ、元気出していこ、留美ちゃん！頑張ろう〜！」

「そうね、一色さんやりましょうか！」

「ジュエリー屋さんも他社多様なんですね、色んな業者さんがいて面白い。あつ、

あそこの業者さんの所は時価20000万円の金塊を触らせてくれるサービスだって…

後で行こうかな。」

「ははっ、初めて来ると目移りするからな。興味があるなら覗いて来いよ。」

「あつ、いや、別にあたしはここで店番に専念しますから大丈夫ですよ

「先輩！」

「あら、じゃあ八幡？休憩の時一緒に見に行こうよ！」

「るくみちゃん？」

「俺は見慣れてるし二人で見てこいよ。」

「そうね、行こうか留美ちゃん。」

「仕方ないわね、行ってあげるわ一色さん。」

何で上から目線なのよ、ホントに。

先輩が可笑しそうに笑ってる…最近よく笑うようになったな先輩。

お昼近くになった時間にオーナーの陽乃さんが顔を出した、一応久しぶりの再会なんだけど

あんまりいい顔が出来ないや。

「お久しぶりだね〜一色…いろはちゃん？だっけ、今日はうちの出店手伝ってくれて

ありがとね♪比企谷君からも聞いてるしうちのスクールにも通ってくれてるって。」

「あはっ、はい…お久しぶりです。オーナーいや、陽乃先輩。」

「こちらの可愛子ちゃんは…？比企谷君の妹さん…だっけ？」

「いえ、鶴見留美って言います。オーナー初めまして、いつも八幡がお世話になってます。」

「ん〜苗字が違うの…うちの…ほくん

比企谷君？あたしと言ういい人がいるのに浮気〜？」

うっすら口許に微笑みを浮かべながら八幡の耳をグイッと引く張ってる。

「ちよつと何言ってるの留美？それとオーナー！耳は俺の1番敏感な所だからダメだって、

てか痛い、イタイ！」

「留美は俺のバイト時代の生徒で今日は手伝いをしに来てるだけですよ、それにオーナー

あなたにも立派な旦那さんと綾乃ちゃんがいるのに俺にチョツカイ掛けてると起こられますよ、全く。」

「駄目だよ〜今は旦那も綾乃も居ないんだから比企谷君のイケず〜

！」

「へく陽乃先輩旦那さんと子供さんがいたんですねくそれにお店のオーナーだなんてあたし、尊敬します！」

「あらくいろはちゃんだっけ？嬉しい事言ってくれるわねく比企谷君なんか、何かと煩いから。」

「どつちが煩いんですか、よく言いますね。」

「ちよつと八幡、本当にこの人と浮気してないでしょうね？」

「あほか！手えくだして見ろ、俺なんか抹殺されるぞ。」

「そんな事ないよく比企谷君だったらいつでもOK待ってるわく。」

「ははっ、遠慮します…。」

「…ふくん、お姉さんまたまた面白そうな物見つけちゃったかな、ふっ。」

一瞬「ゾクツ」と背中に冷たい物が走った気がした。

イベントは盛況で即売会にも大勢のお客さんが押し寄せました。

今回、REAL一押し of

新作は…先輩力作の神話シリーズ、堕天使のペンダントにブレスなどのラインナップです。

リアルに造形された他店にない美しい作品で手にとって見た時の感触や高級感、所有者の

満足感を十分に味わえる物となっている。これが思いもよらず評判で一部の作品が

専門誌やファッション誌の取材を受け次号に掲載されるみたい。

「凄いよ八幡のアクセ、メチャ目立ってるし雑誌の取材も受けて評判いいみたい…売れるかも。」

「先輩が作ったんだから売れるに決まってよ、留美ちゃん。」

「悔しいけど、その意見には賛成だよ。」

「ウフフ、比企谷君のお陰で大盛況ねくそうだ…こんなシリーズ名はどう？『リアルゴッドシリーズ』って？」

「ちよつとオタクっぽいけどいいですね！」

「うん、いいと思う：ね、八幡！」

「まあ：いいんじゃないですか。」

「もおく！ブランドチーフデザイナーなんだからもっと、ドヤ顔してくれなきやあ、

あたしも鼻が高いんだから！」

「本当に綺麗なアクセ：でも、このアテナの顔って：オーナーに似てない？八幡」

「ああ、知性、戦神だからな：それと美人だしモデルにさせてもらった。」

「あらゝあらん♪嬉しいかもゝ嫌だなくア・テ・ナなんて：フフっ、旦那に自慢しちやおかなゝ

あたしの彼氏があたしをモデルにアクセ作ってくれたよって言ったら妬いてくれるかなあゝ、

ねっ比企谷くうくん！」

うつ、そう言つてオーナーの陽乃先輩は八幡の二の腕に自分の腕を絡め出した。豊満な胸を

腕に押し付けて嬉しそうにしてる。

「ちよつとオーナー！先輩も嫌がってますしオーナーには旦那さんや子供さんがいるんですからダメです！」

「えゝ、何で一色ちゃんがダメ出しすんのよく比企谷君だって嫌がってないよゝ？」

「からかうのもいい加減にして下さいよ、オーナー。他の業者さんも見てますし。」

「だつてゝいいじゃん、比企谷君てばあゝ。」

「兎に角、ダメです！」

「ケチいゝ詰まんないの。」

隣で見てた留美ちゃんが顔をプルプルさせて真っ赤になつてる。

「おや、留美ちゃんどうしたの大丈夫？お姉さんがお兄さん取りそつで怒つてるのゴメンねえゝ

じゃ、次回からは留美ちゃんのいない所で比企谷君とイチヤつく事

にするからそんなに怒らないでね〜♪」

「オーナー、先輩に絡み過ぎです！兎に角、精神衛生上よくないですから先輩に絡むの控えて下さいね。」

先輩も気を付けて下さい！」

「あ〜ん、比企谷君の彼女じゃない一色ちゃんに怒られちゃったよ比企谷君、何で

比企谷君に絡むと一色ちゃんや留美ちゃんが怒るのかなか不思議だね〜比企谷君？」

「知りませよ、そんな事は。兎に角、ああ言ってますから今後はオーナー気を付けて下さいよ。」

示しがつきませんから。」

「は〜い、比企谷君が言うのなら陽乃…言う事聞〜。」

殴っていいですか？このオーナー殴っていいですか？

.....

お昼を回って3時頃やっとオーナー…陽乃先輩は帰っていった。

「イベントよりオーナーがいる時の方が疲れかたが増すよ。」

「留美ちゃんに賛成〜帰ってもらってホツとしたよ。」

「だから言ったんだ悪魔だつて。」

「だけど違う意味で応援してくれてるみたいなのが今回したかな、そう思わない留美ちゃん？」

「あのオバサンやるね…。」

「それ本人いたらひどい目に遭うよ。」

「あはは、私達を苛めた仕返しよ。」

「ほんと、知らぬは本人ばかりかな…か」

オーナーが帰った後入れ替わるように結衣先輩がうちのブースに顔を出してくれた。

「お邪魔するのが遅くなってゴメンね〜ヒツキー、いろはちゃんに…留美ちゃん？ヤツハロー！」

「ヤツハローです、結衣先輩！相変わらずですね、その挨拶…」

「おう、由比ヶ浜よく来てくれたな。」

「こんにちは由比ヶ浜さん。」

「それにしても凄い人手だね〜なかなか辿り着けなかったよ、つと〜うわあ〜ヒツキーの

新しいアクセ凄いね〜！」

「そうなんですよ、午前中に雑誌の取材受けてたんですよ、ねっ、先輩？」

「へえ〜ヒツキーやったね！綺麗…あつ、これ？」

「えっ？」

結衣先輩が声を出して、見詰めてる目線を追い掛けて新作をよく見てみた。

「このアクセ、ユキノンに似てないかな…」

「えっ？そう言われてよく見てみると、こっちのヘステイア様は結衣先輩に似てますよ。」

「先輩…？」

「ん？…まあ、その なんだモデルにさせてもらった…勝手に使ってその…悪い。」

「え〜いいなあ〜二人ともアクセのモデルなんて。」

「えへへっ、嬉しいかも〜ヒツキーありがとね！」

「まあ、付き合いが長いからな。」

「いいなあ〜あたしと留美ちゃんは次回ですか残念です！また期待しますね先輩！」

「あら、一色さん私モデルのアクセならもう既に八幡から作ってもらっってお店のラインナップに

なってるの知ってるでしょ？」

「そういえば何時も留美ちゃんが着けてるフェアリーのプチペンダントって、まさかあれが…と思うってると。」

留美ちゃんは白く細い首元に輝くフェアリーのトップを手に絡ま

せ我慢気に言った。

「私の誕生日に八幡がプレゼントしてくれたの、私の宝物よ。」

「……………よかったね留美ちゃん。」

ジーっと先輩の方を見ていると

「何だよ一色。」

「いえ…別に…」

「……………」

「何だよ…一色のモデルのは…ほれ、これだ…展示する時まで見せなかつたしな。」

気付いていると思ったが…

「えっ、このエンジェルあたしをモデルに？」

「どれ、うわ〜可愛いくいいなくいろはちゃんのが一番可愛いよお〜！」

「フンだ…八幡、あたしのはないの？」

「留美のは一番最初のにつつたぞ、それに既に製品化済みだ。」

「新しいのではないの？」

「また今度だ。」

「絶対よ、約束だよ八幡…。」

「あ〜覚えてたらな。」

「直ぐにおねだりして作らせちゃうから！」

「ぐぐっ、まあ〜留美ちゃん？先輩も疲れてるから一息ついてもらわないとね。」

「何よ、自分は作ってもらったから『余裕〜』みたいな雰囲気醸し出しちゃって。」

「みんな平等に作るから待ってろって。」

みんなには言わなかつたけど、先輩が私にくれたコンビのプチクロスも今回

展示品の中に含まれてたのは黙ってよつと、ありがと先輩！

いろはの不安

イベントの2日間が終わり後片付けして会社まで戻って来たら9時を回っていた。

「二人ともありがとうな…助かったから気を付けて帰れよ。」

「八幡、送つてくれないの?」

「留美ん家はちよつと遠いから送つてやりたいんだけど、すまん!まだ、片付けが残ってるからまたな。」

「あのね、お母さんがね珠には遊びに来てつて。次いでにお泊まりもしてきなさいつて。」

「あつ?留美の母ちゃんそんなに俺の事気に入ってたか?いつも留美の成績を上げるよう考えろつて文句言われてた気がするが。」

「今はそんな事ないから八幡が来るの楽しみにしてるし!」

「はは、じゃまた今度寄らせてもらうよ。」

「今度つて、いつになるの?はぐらかさないで!」

「手の空いた時まで待つてくれ、此処んどこ徹夜続きだったし流石に疲れてへトへトだ頼む。」

「分かった…じゃあ帰るよ八幡…」

「ごめんなさい…我が儘、言つて…」

そう言つてそつと、八幡に抱き着いた。

ああ…言葉が出ないくらい健気で先輩の事を慕う彼女のいじらしさを感じるつて、違〜う!

「こら、留美…ダメだ。また来週な。バイト頼むよ。」

先輩が抱き着いた留美ちゃんを引き剥がそうとしても離れない。

「いや…もう少し… もう少しだけ…」

あ…留美ちゃんの手が先輩の背中まで回つてる、駄目だよこんなの。

「離してくれ留美、片付けが出来ない。」

「……」

離れてお願い先輩……

「おっぱいが大きくなったな留美……」

先輩が小さな声でボソつと一言いったら、急に留美ちゃんが先輩を突き放すような格好で離れた。

「八幡のバカ!! エッチ! 急に変な事言つて信じらんない。もう大嫌い!」

「ははっ、気を付けて帰れよ留美。」

「フンだ! お休みく八幡。一色さんもく。」

「あは、気を付けてね。」

照れ臭いのか駅前通りを留美ちゃんが小走りに帰って行った。

「…行つちやいましたね留美ちゃん。」

「ああ……」

「一色も疲れたろ? 早目に上がってくれ、お疲れ様だ。」

「あたし、まだ大丈夫ですよ。それに先輩だつて徹夜続きだし。」

「俺は直ぐ寝る事が出来るが一色は朝早いんだろ? 遅刻するぞ。いいから上がってくれ。」

「はい…分かりました。でも…あたしの事は心配しないで頼つて下さい。今日はお疲れ様でした、明日また来ますね!」

「ああ、助かったありがとう一色。おやすみな。」

「おやすみなさい先輩……」

後ろ髪をひかれながらも先輩に頭を下げ一人、駅に向い家路についたのであった。

……

アクセイベントが無事に終わり売上も上々! 最初のスクール日、先輩は生徒さん達に冷やかされていた。

「比企谷先生のアクセ評判良かったわね〜! 今や新進ジュエリーデザイナーの1人だもん! やっぱりあたしが見込んだだけあつて間違えはなかったわ〜、それにいい男なんだから〜。」

「あゝ富田さん、からかわないで下さいよ。」

「謙遜しないで比企谷先生くあたしはね先生の作品に惚れてスクールに通ってるんだから。」

「ありがとうございます、でも、俺なんかまだまだですから。」

「そんな所がまた憎いのよ。ホント誰かさんみたいにホレちゃうんだから！ね〜一色ちゃん？」

「あは、そうですね〜富田さん。」

富田さんやスクール常連さん達がニヤニヤと此方を伺ってる…もう。

生徒さんに冷やかされて照れ臭いのか先輩はいつになく無愛想（クール？）で寡黙に、あまり声を掛けようともせず講習を終らせ送り出しをしていた。

ざっと後片付けをして何時もの様に先輩の夕食を作ろうとする時に突然、オーナーの陽乃さんがいい事でもあったのか嬉しそうにお店に入ってきた。

「ピヤハッロー、比企谷君〜！おつ、一色ちゃんもお疲れ〜！」

「今日は巡回でもないのに珍しいですねどうしたんですかオーナー？」

「やったよ〜比企谷君〜！決まったんだから♪比企谷君のお陰なんだから〜！」

「一体どうしたんですか？大袈裟な。」

「もお〜比企谷君てば大好き〜♪」

オーナーは嬉しさの余りいきなり先輩に抱き着き頬つぺたにキスしました。

「あ〜〜！オーナー先輩に何て事するんですかあ〜！抱き着くのとキスするの禁止ですセクハラです〜！」

つい先日、留美ちゃんに抱き着かれたばかりなのに、もお〜！

「だって比企谷君がやってくれたんだもん〜大好きだよ〜！」

「兎に角、落ち着いて離れて下さいオーナー。」

「あ〜ん、比企谷君〜ん。愛してるう〜。」

「止めてくださいオーナー！何があつたんですか？」

「決まったのよお、高〇屋の出店が！後ね、松〇屋も！何度か交渉してたけど今回のアクセイメントで比企谷君のリアルゴツドシリーズがオブザイヤーをもらったお陰で雑誌とマスコミに載ったしネット通販も大量契約が取れたし、もおく陽乃、比企君大く好きー！」

「…そうですか、喜んでもらって良かった。」

「先輩、おめでとうございますー！」

「ああ…ありがとうな一色。」

先輩…あんまり嬉しそうにしてない。

「先輩…？」

「うん？ああ…何でもないから。」

「そうですか…」

なんでたろ、先輩に何時もの元気が無いような気がする。

それでもオーナーが御祝いにご飯を食べに行こうって事になって焼肉屋さんで二人ご馳走になった。

「二人前、6000円の上カルビーを6人前に5000円のタン5人前に、ロース肉…凄いご馳走。」

「どんどん食べてねく比企谷君、一色ちゃん！足らなかつたら追加注文しちゃうから遠慮しないで食べて食べて！」

「先輩く美味しいですね、ビールのお代わりはいいですか？あと、こっちのタンはもう焼けてますから塩で食べますよね。」

「うん…上手いな、一色もオーナーがああ言ってるから俺の事はいから遠慮するなよ。」

「はいく♪ビールも美味しいく恵比寿？初めて飲みましたけど全然違いますね。」

「ああ、俺はドライ派だけだな。」

「……美味しい？良かったく喜んでくれて。」

「それにしても比企谷君、今回の新作の出来栄えは最高だねあのシリーズの他に限定品を出すのってどう？予約販売で限定300個とかき。」

「1個30000で300:9000000悪くないですね、これからはネット通販だから大量に裁けるし当たれば大儲けできる。」

「そうよ、比企君やつとあたしの言ってる事分かってくれたんだ。ブランドが定着してくると独り歩きしだすのよ、何もしなくてもその名前だけで売れていくの勿論それなりの品質が伴わないといけないけどね!」

「スクールの生徒さんもここんとこ2倍になったしすぐに100名位になりそうよ。」

「それは困る:新作を作る時間がなくなるから。」

「大丈夫よ、新店舗の方でカバーするしそちらの方の講師は用意するから。あつ、そうだそっちの講師を一色ちゃんに頼もうか?」

「彼女はまだまだですよ、オーナー。それにOLなんだから。」

「あら副業で色々やってる子なんていくらでもいるんだから、それに今すぐじゃあないからね。レベルを上げてからのお話よ。」

「ならいいが、一色の場合善意で手伝ってるから甘える事が出来ないし。」

「あたしなら何時でも喜んでお手伝いしますから言って下さい!」

「ありがとうね、一色ちゃん!そう言ってもらえると嬉しいわ。」

「……………」

「先輩…?」

「うん?ああ:何でもない。」

どうしたんだろう:時折寂しそうに先輩の顔が曇る。こんなに順調に仕事が

進んでるのに?

話題の留美ちゃん

どうしたんだろう…時折寂しそうに先輩の顔が曇る。こんなに順調に仕事が進んでいるのに。

「それと比企谷君、例の件だけど考えてくれてるかな？」

「前向きに検討してますから。」

「そう、良かったわ。今日は兎に角、食べてね♪」

その日は美味しい焼肉に3人舌鼓を打ったのであった。

……

「雑誌に載ったゴッドシリーズってありますか？」

最近、よくお店に来るお客さんから聞かれる質問だ。

あつた、これだこれだ！おゝスゲー格好いい！全部揃えると40万か…うくん、思い切って買うか。12神全部下さい！」

今週、これで8人目だけど高額でもよく売れて嬉しい、単品も欠品が出るくらいだしホント、ネット販売って凄いな。

梱包が間に合わないくらいの売れ行き。

「あ…はい、ありがとうございます少々お待ち下さい。」

「12神セットで買うとフェアリーかエンジェルのアクセどちらかが貰えるんだよね？」

「うくん、迷うなくお姉さんどっちがいいと思う？」

「お客様のお好みなので好きな方で。」

「あゝ迷うなくどっちがいいかなあゝ。」

「お包みますので最後に教えて下さいね、お客様♪」

オマケのフェアリーとエンジェルを選ぶ比率は今の所半々…と言う事において。

「じゃーフェアリーでお姉さん、お願いします。」

「…はい、ありがとうございます。」

はあ…エンジェル選んでよ、留美ちゃんのばっかり出る。

「あの…」

「はい、何ですか？お客様。」

「今日は雑誌とかネットでモデルやってた店員さんの子っていないんですか？」

「あゝ留美ちゃんの事かな？あの子は土日のバイトさんだから今日はいないの、御免なさいね。」

「そっかあゝ楽しみにしてたんだけどなあゝ。」

「あはっ、またよつて下さいね。あたしも夕方ならいますから！」

「あ、はいはい。ありがとう…」

ぐぬぬっ…ここに来てもう1つの話題は留美ちゃんの人気に火が点いて凄いの…男性のお客様の殆どがキョロキョロしてるし、よく彼女の事を聞かれる、あたしが居るのにね。この前も写メ撮らせてと言われて留美ちゃん困ってたし…

「あゝん、留美困っちゃう八幡助けてよ〜！」

甘えた声で留美ちゃんが先輩に助けを求める。

「写メくらい、いいんじゃないやね？俺なんか『12神のハーデスのデザイン何とかなりませんか？』って言われて流石に落ち込んだぞ。」

そうなんです…実は先輩…自分をハーデス神のデザインにしちやっただんです。

だから他の神々と比べある意味妙にリアルで浮きまくり…1番売れないし、ネットでもお問合わせメールに「あのハーデスの顔を見るとこつちまで暗くなるからデザインの變更をお願いします。」とか入ってて落ち込んでるんです。

先輩と二人実は僻んでるんですよおくだ。

因みに1番人気なのが美の女神のアフロディーテ…ええ、モデル？雪ノ下先輩…妹の方ね。何でかな？あたしと差があり過ぎる気がするんだけど。2番人気が太陽神アポロン…モデル葉山先輩、あたしが

高校一年の時だったら10固は買ってた傑作。後はどんぐりの何とかで（先輩が中々口を割らなかつただけ）他のモデルがあるのか聞いてみたら…海神ポセイDONは中二病の材木座さん…よかつた女神になれて。ヘルメスは戸部先輩…軽い感じがイメージピッタリ！東京でデザイン会社興して活躍してるんだって凄いな。アルテミスは小町ちゃん、よく似合いそう。それと後…聞くところによるとね、前回販売された墮天使シリーズのメデューサは平塚先生なんだって。髪長かつたしよく似合いそう、あつ、先生に怒られちゃう。先生はその後ご結婚されて幸せになつてるそうですよ、でもモデルの事は内緒との事です。

「ネット注文つて凄いですね、今日なんか海外から注文来ちやいましたよ。」

「イギリス在中のお客さんからだな。」

「アメリカのバイヤーからオフアアが来てるみたいな事を言つてたなオーナー。」

「凄いいじゃないですか先輩！」

「今月はブツブツ言われなくて済みそうだ。」

「そうですね〜一杯売れてるし留美ちゃんのお陰でお店も繁盛してるし。」

「ホント、お店に来るお客さんの半分近くが留美ちゃんの事を聞くと妬けちゃう。」

あたしがいる時でも聞かれるし、つい愚痴が出ちゃう。

「一色はあざといからな。」

「今は其ほどでもないですよ〜だ、先輩〜♪」

「でも…先輩の前では素のままなんですからね。」

「あくはいいい。」

「もおくちゃんと聞いて下さい！」

.....

週末土曜日のお昼過ぎ

「そろそろ、お客が引けてきたし宅配物も片付いたし一服するか。」

「はい。」

「留美ちゃん、お茶の準備しようか？」

「そうね、じゃ私持ってきたお菓子用意するわ。」

「ありがとう！お願いね留美ちゃん。」

紅茶の香りが店内に漂ってきた頃、若くこざっぱりとして感じのいい男性が訪ねて来た。

「此方に鶴見留美さんという方はいらっしゃいますか？」

「えっ、はい…わたしですけど。」

「申し遅れましたが私、モデル事務所のスカウトをしている田中と申しますが鶴見さんですね！」

「はあ…」

「鶴見さん、突然で申し訳ないのですがモデルになってみませんか？ジュエリーフェアとネットで話題になってますよね！あっ、私たちの事務所は決して如何わしい事務所ではないので安心して下さい。是非一度少しいいのでお話だけでも聞いて頂けないかとお願いしたいのですが。」

「あっ、私そんな事全然考えてませんから。其れに今は仕事ですから迷惑です！」

「ごめんなさい！仕事がつい、場所もわきまえずに失礼しました。よろしければ名刺を置いていきますから何時でも構いませんのでご連絡下さいお待ちしております。では、これで。」

残念そうにスカウトさんは頭を深々と下げて帰っていった。

留美ちゃんがテーブルの上へ無造作に「ポン」と置いた名刺には…「あのスカウトさん〇ス〇ープロモーションって名刺に書いてあるよ。」

「はあ〜一昨日は〇リプロに〇音、他2社の会社の人からモデルにならないかって言われたけど興味ないから。誰かさんはちつとも気にもしないし。」

「それにしても留美、まあ…スカウトのお眼鏡にかなうなんてそんな
に無い事だと思うぞ。きつと留美には素質とかがあるんじゃないか
？こんな所でバイトなんかしてるよりずっと面白いかもな、クリパの
時だっけ？演劇スゲエ上手かったし、案外いいかも、モデルになった
留美を見てみたい気もする。」

「あれは八幡がよろって言ったからだよ！あたしはそんなのどうでも
いいの、八幡のバカ！」

「へいへい、そうでした。」

「でも…八幡が見たいとか…」

「…有名になっちゃったね留美ちゃん、でも凄いねトップクラスの
芸能事務所ばかりじゃない？勿体無いような気が…」

癪だけど女のあたしから見ても留美ちゃんって凄い美少女だしス
マイルも良くて格好良いもん…イベントの時なんかお店の商品を着
けてニツコリしてたら忽ちカメラマンなのかな？写真撮られまくっ
てて何処のタレントが来たのかってちよつとした騒ぎになったくら
いなんだから。ジュエリーフェアのホームペにオプザイヤーを頂い
たお店のアクセを着けて名前と写真が掲載されてから…あたしなん
かカメラマンにピーアールしても全然写真撮ってくれないから余計
頭にきちやう。だけど、今まで彼氏も居ないので不思議な気がする
なあ。

「いいの、やっぱり興味ないし。やりたいなら一色さんが連絡してみ
たらどう？」

機嫌悪そうに留美ちゃん先輩の方を気にしながら呟いた。

「あは、あたしはチビだしスタイルだつて…ねっ。留美ちゃんはスタ
イルいいし、背も高いからモデルさんでもOKかなつて。」

「あたしそんなに大きくないよ、162だもん！」

「あたしより4cmは大きいよ、羨ましいな。」

「男の人は小さい女の子の方が好みでしょ？」

「それは人によるんじゃないかな、あたしは逆に低い方だから留美ちゃんみたいにスタイルがよくて洋服が似合う人がいいと思うよ。」

「ねっ、八幡は…どんな感じの人が好みなの？」

「あつ？そんなの似合ってれば何でもいいんじゃない？」

洋服選んでるんじゃないからね？気にもしてないみたい。

「もう、八幡く聞いてるのにいっ！」

「あくどつちも可愛いよくどつちも素敵だなあく。」

留美ちゃんがジト目を先輩に向けて口を膨らませ拗ねてる、あたしも同じく…また適当な事言っってはぐらかす先輩に、大きく溜め息をついた。

二人、不満を抱えながらもお茶菓子を頬張りながら一時のおしゃべりを楽しんだ。

.....

「ねえ、一色ちゃん噂で聞いたんだけど知ってる？」

「えっ、何をですか富田さん？」

火曜日のスクールが終わり片付けをしながら常連の富田さんがあたしにイソイソと話し掛けてきた。

「あたしも他所のお店で聞いただけなんだけど、比企谷先生がねお店辞めちゃうって言う噂話。」

「富田さくん、何処でそんな話聞いて来たんですか？もおくやだなあ、先輩が辞めるって聞いた事ないですよ。」

「そうよね、一色ちゃんが知らない訳ないもんね、一色ちゃんは先生のいい人なんだから知らなかったら大変だ。」

「いやだあ、富田さんたら、そんなんじゃないやありませんよ。」

「何でも海外に行くとかで近々辞めるって聞いたのよ、嘘よねく一色ちゃん？」

「えっ？まあ…そんな話聞いてませんし誰が言ったんですかねくははっ。」

嫌な予感がする…まさか…先輩が…あたしに黙って辞めるなんて、嘘であってほしい。

・
・
・

富田さんの一言が何故か引っ掛かる…よく会社なんかの決定事項を他所から聞いて驚く事があるけど、まさかね。

最近の先輩…不安になります。でも先輩ならちゃんどあたしに話してくれますよね、絶対信じてます先輩…。

留美のお祝い

コツコツと小槌の音が、心地よく響き渡る何時ものリアルの工房：

「もう簡単な手直しなら一色でも大丈夫だ、上手くなったな。」

「そんなに誉めると照れちゃいます。先輩が見ててくれるから頑張れるんですよ。」

「あく見てなくても頑張るように。ほれ、そこ気を付けろ。」

「あつ、は〜い先輩！」

あれから何事もなく毎日が過ぎていく。

先輩も何時もと変わらないし、あれから噂話はたち消えたようだし、だけど直接聞いた訳じゃないからあたしの中で不安が消えてない。聞きたいけど聞けない…何かが壊れる気がする。

先輩…あなたを信じてます。

………

「留美ちゃんって凄いですね、『あつ！』と言う間に雑誌デビューしちゃって人気出ちゃって。」

それでも暇をみてはお店に顔を出しに来てる。

「おう、俺も最初自分の目を疑ったぞ！何も聞いてなかったし言わなかったからな。少し用事でバイト休みたいって聞いただけだ。」

あれからお店に訪ねて来たスカウトさんの事務所にお世話になる事になった留美ちゃんは瞬く間に週刊ヤンジ○ン、ヤン○ガ、マガ○ンに載っちゃって人気に。中には水着のピンナップもあって本当ビックリ。

話題になってから何喰わぬ顔でバイトに来た留美が顔を赤らめ先輩に尋ねた。

「ねっ、八幡見てくれたんでしょ…雑誌。」

「あゝ、…まあ…見たぞ。その…何だ、いいんじゃないの。」

幼馴染みの着替えを偶然見てしまったラッキースケベの義兄が義妹に言い訳がましく顔を真っ赤に誤魔化してるモード炸裂ね先輩…。

「あ…ありがと…」

留美ちゃんも恥ずかしいらしく伏し目がちにチラチラと先輩を見ながら顔真っ赤にしてる。

「その…どの辺がよかった？八幡…」

「俺にそんな事聞くなよ。」

「だって八幡がモデルの留美を見てみたいって言うから。それに気になるじゃん！どの辺がよかったか言つてよ！」

「まあ…よかったよな留美の載ってる雑誌、一色？」

何でそこをあたしにフルの先輩！

「そうですね〜♪先輩〜留美ちゃんの載ってる雑誌、全部買ってあたしにも見せくれましたもんねえ〜」

思いつきり二の腕をツネってやった。

「てえ〜！一色、何でツネるんだ？」

「さあ〜？」

「ねえ、八幡…一色さんに聞いてないし八幡に聞いてんだけど！」

「あ…あゝまあ〜その…お尻とか？ほら…オツパイとか？」

先輩…それ、女の子に最低な一言だから絶対キモい… 加えて不気味な薄ら笑いやめて下さい！

「八幡のバカ…」

流石の留美ちゃんだって怒るよ。

「先輩って何処までボケんですかそこは『水着が可愛いかったよお〜』とか『眩しくてとつても可愛かった』って言うところじゃないですか？バカなんですか？誉めてもらいたいのに留美ちゃんじゃなくても怒りがこみ上げてきますよお〜ホントにいく！もっと女心を考えて下さいね！」

「何で一色に怒られなならんの？まあ、一色が言つてた通りだから、よ

かったからな、留美ホント。」

「まあ、八幡がよかったって言ってくれるんなら許すよ。」

留美ちゃんに背中を突つつかれてる。

あたしもダイエツトしよかな…ウエスト留美ちゃんに完全負けるし、てか他も色々負けてるけど、いいでしょ？別に。」

「ねえ、八幡…あたし○カリのモデルに決まるかも…決まったらバイト来れなくなると思う…」

寂しそうに留美ちゃんがポツリと言いだした。

「クライアントのOK出たってマネージャーさんが言ってた。この前、何かットか撮影して、いいって言われてて…」

えっ!? 『○カリ』って…CMの？留美ちゃん凄い…

「留美、こんな所で油なんか売ってる暇なんか無いんじゃないか？」
俯いた留美ちゃんが消え入るような小さな声で一言言った。

「あたし八幡が嫌だったら辞めるから。モデルなんかどうでもいい。」

「…そっか残念だな。」

「ねえ…『嫌だ』と 言ってる。」

飲みかけの冷めた珈琲をゆっくりと飲み干し、先輩が留美ちゃんに尋ねた。

「…留美、モデルやってみて面白かったか？これからもやってみた
いと思っただか？」

「そりゃ…少しは…憧れもあったし面白くないって言ったら嘘になる
よ、でも八幡が辞めろって言うなら辞めてもいいし…」

「じゃ…留美は俺が言うことなら何でも聞けるし何だって出来るんだ
な？」

「……うん…。」

ちよつと先輩！ホントに言うの？

「…バツカ留美、何でも聞ける訳ないじゃないか、留美は俺の奴隷か

よ？今時そんなの無いぞ！それに留美はモデルの仕事を面白く感じている。俺には留美が面白いと思っっている事を辞めろなんて言える事は出来ないし言う資格もない。」

「そんな事はないし、八幡が言うならあたしは…」

「留美、他人や俺のせいにするな。自分のやりたい事をやれ。」

「……八幡……」

戸惑い気味に言葉を詰まらせ話す留美ちゃん。

「面白かったんだろ？もつとやってみたいんだろ留美？」

やがて決心したかのように静かに頷いた。

「…うん。」

「ならチャレンジだな、留美にはモデルの素質があるんだしやりたい奴はゴマン居るのにその中で選ばれたんだ。みんなの分まで頑張らなきゃあな。」

「別にみんなの分はどうでもいいけど面白いのは分かる。今までやりたい事なんか無かったし……やってみるよ八幡。」

「ああ、お店のバイトは来れる時でいいし何時でも遊びに来ていいから安心しろ。」

「ホントに？あたしが来れなくなっても大丈夫？それに一色さんが八幡にチョツカイかけそうで？」

「アホか、そんな事ある訳ないだろ！」

むうくなんかその言い方ムカつくんですけど。

「ちよつとく留美ちゃん？どう言う意味かな？あたしじゃくダメって事なの？」

「だってあたしがいる時とない時じゃあ、売り上げ段ちでしょ？」

クスリと悪戯つ子ほく笑いながら留美ちゃんが言う。

ぐぐつ！事実、留美ちゃん来たときの売り上げは……

「あたしだってそれなりに化粧したりコスプレしたらまだまだなんだもん！会社だって

「若手のホープだし！」

「おい、一色？キャラが由比ヶ浜だぞ……」

「あははっ、ですよね〜兎に角留美ちゃんいなくても売り上げなんか先輩の造る作品が」

「いいから大丈夫ですよね〜先輩？」

「まあ、それは言えるよ八幡のアクセならあたしもいいと思う……」
「バツカ買被り過ぎだっつう〜の。」

先輩が笑って誤魔化した。

「まあ、その……頑張れよ、留美……」

照れ臭そうに頬をポリっとひと掻きして先輩がポツリと、
そして留美ちゃんの頭にそつと手を置き励ました。

「……うん。」

穏やかに優しく……留美ちゃんの目に光るものが浮かんでいた。

優しそうな先輩の顔が少し胸をキュンとさせる……

あたしにはした事のない表情だ……

満足そうに頭ポンをされてる留美ちゃんと先輩を横目で見ながら
羨ましくて仕方が無い！

いいもん、あたしもまた先輩にしてもらうんだから！

今回は特別に留美ちゃんに譲るんだ……いつかあたしにも、そんな
顔をして下さいね先輩……

「よし、今日は留美の門出と言う事でお祝いしなくちゃあな！みんな
で飯でも食いに行こうか？」

「何ですか？急にあたしがいくら誘っても行かないくせに……！」

「あ〜、そうだな……兎に角だお祝いをだな、」

「分かりました、折角の門出にケチを付ける訳にもいけません。みんなでご馳走を食べましょうよー」

「え〜八幡だけじゃないの〜？一色さんもくるんですかあ〜？」

「ふふっ、留美ちゃん？」

留美ちゃんと睨めっこに・・・お互い「ニイ〜」と笑い合う。

「うっ！あはっ！一色さんの顔何それ？」

「よく言うね留美ちゃんも、もつと愛想良くしたら？モデルさんなんだし。」

「お前ら、頼むから仲良くしてだな。」

もうダメ・・・

「あはははっ！」

その後、3人でお祝いに居酒屋さんに出向き大騒ぎをしながら留美ちゃんの

お祝いをして最後はタクシーで留美ちゃんを家に送り届けたのであった。